

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における 地域教育実践の展開について

—現地教師等が書き綴った教育関係雑誌論稿等の文献一覧の作成から—

土屋直人*

1. はじめに—課題意識・問題関心、本稿の趣旨—

2011年3月11日に発生した東日本大震災、地震・津波被災と、その後の福島第一原発「事故」による原発被災（原発災害・原発被害）、「その時」とその後の時間のなかで、特に甚大な被害を蒙った（いまも蒙っている）、東北沿岸の「被災地」（ここでは直接には、三陸・太平洋沿岸地域の、甚大な津波被害を直接蒙った箇所あるいはその周辺、そして福島県における原発「事故」、放射能汚染や避難等にかかわる被災・災害が広く各様に及んだ箇所・場所、あるいはそれらに関わる地域）の現場教師たち、あるいは様々な状況にあった「東北」の教師や教育関係者たちは、現地であって、いかなる惨状・状況の中で、いかなる思いを以って、いかなる活動を行ってきただろうか。そしてあれから約5年の間、その地域に生きる教師たちが切り拓いてきた教育実践とは、どのようなものだったのだろうか。

3・11大震災後、複数の教育関係雑誌には、被災地の子どもと学校・教職員の折々現状や、とりまく課題の現実、津波・原発被災のなかの学校と地域の人々の苦境と受苦体験、その中で教育実践（へ向けて）の格闘、あるいは問題提起等を、現場教師等が書き記した多様な論稿が、数多く掲載されてきた。これらの報告や記録の一部からは、3・11のその時、地域・学校の現場で何が起こっていたのか、教師たちはどう考えどう動いたか、そしてその後の事態に、その地域に生きる教師たちは何を思い、どういう教育実践をどういった状況の中で創って（創ろうとして）きたか、即ち、被災後における教師の事実と、教育実践の実際とその展開の一筋、その仔細の現実（＝リアル）を、窺い知ることができる。

では実際に彼らが自らの手で記した現地報告・実践記録には、具体的にはどのようなものがあり、この間、誰がどのようなことを、どのようなことばで書き綴ってきただろうか。

筆者は、「東北」の教育実践史への問題関心から、昭和戦前期東北に生まれた、教育文化の伝統と蓄積を持つ「北方性教育運動」、東北で戦前から戦後に続く生活綴方教育実践の実際とその展開に、以前から一定の関心を持ってきた。そうした問題関心から、特に3・11大震災後は、東北の教師たちが「あの日」とその後どのような状況の中でどのような思いで、つながり活動し、教育実践とその研究運動を深めていった（そして、いまもいる）のか、北方性教育運動（の伝統の継承）、東北の民間教育研究運動の文脈に連なる、「被災地」の教師の営み、その地域に根ざした教育実践の動向・展開はどのようなものであったかについて、研究的な課題意識を持

* 岩手大学教育学部社会科教育学研究室

ち、様々な現地の現実に学ぼうと努めてきた¹⁾。「震災」渦中にある、「東北」沿岸被災地での、現地の教育実践や教師の営みの現実とその価値の（後の時点・地点からの）繰り返しの「学びなおし」は、未だこれからの仕事であろう。

本稿は、3・11 東日本大震災後の東北沿岸被災地等における「地域教育実践」²⁾の実際とその展開について探るための一基礎作業として³⁾、幾つかの教育関係雑誌や書籍等に注目し、「被災地」や震災渦中にあった（ある）当事者、現場教師らが書き綴った教育関係雑誌論稿等の書誌を文献一覧として書き留めて、その展開の一つの現実の姿を捉え確かめようとする、準備への試みである。ここでは、特に被害が甚大・広範に及んだ東北被災3県（主に岩手、宮城、福島）等の教師・教育関係者たちの、現地の状況等の報告記事や、学校等における教育実践等を記した論稿（2011年6月頃以降、2016年末現在までの約5年半の間に公開されたもの）を抽出し、その書誌を県別に、時系列に沿って年度ごとに整理・記述し、それらを列挙した一覧を、文献一覧・目録のかたちで示したい。

本稿では、前述の問題関心から、東北3県沿岸地域等の現場教師等の記録・声が克明かつ多様に記されている論稿を掲載し、また戦後教育実践史の展開の中で比較的歴史の深い全国的な民間教育研究団体等の機関誌として、以下の7種の教育関係雑誌（全国誌）に主たる検討対象を絞った⁴⁾。文献一覧は、それらの、3・11以降の全巻を参照し作成した。

- ・教育科学研究会（教科研）編：『教育』（月刊）（及び、同会編の出版物も含む）
- ・日本生活教育連盟（日生連）編：『生活教育』（月刊）
- ・歴史教育者協議会（歴教協）編：『歴史地理教育』（月刊、増刊号年3回（3月・7月・11月）も含む）、『歴史教育・社会科教育年報』（年刊、* 2014年版で終刊）
- ・日本作文の会（日作）編：『作文と教育』（月刊）
- ・全国生活指導研究協議会（全生研）編：『生活指導』（月刊、2012年4/5月号以降は隔月刊（発売元：高文研））
- ・民主教育研究所編：『季刊 人間と教育』（季刊）、『民主教育研究所年報』（年刊）
- ・クレスコ編集委員会・全日本教職員組合編：『クレスコ』（月刊）

なお、共著書籍に所収の論稿・論文のほか関連学会誌も参照し、その一部も対象とした。

一覧・目録に掲載する文献については、主に東北の太平洋岸・三陸沿岸の「被災地」（及びその近隣地域）に、当時あるいは震災前後現在まで勤務する、現職の幼稚園・保育園、小・中・高校の教諭、養護教諭、事務職員等の教職員が書き記した現状報告レポート、教育実践記録等を主な対象とし、論稿内容によって、退職教職員や学校長、教育・福祉関連諸施設の教職員、学童保育の関係職員等の記録、その他関連する論稿等も対象とした。

そして、それにあわせて、本稿では第二に、特に比較的多くの論稿・実践記録を書き記し公表している教師＝実践者については、一覧とは別に独立させ、各章内に別項を立て、その当該実践者の記録・論稿の文献一覧を作成して示し、その実践記録の全体像・特質を確かめるための一補助作業としたい。具体的には、岩手の佐々木宏記氏（元小学校教諭）、宮城の阿部広力氏（小学校教諭）、制野俊弘氏（元中学校教諭）、徳水博志氏（元小学校教諭）、福島の白木次男氏（元小学校教諭）の5氏を個別の対象とする。また関連する諸論稿や先行諸研究の一部についても本稿の最後部で文献一覧を仮提示し、批正を乞いたい。

本稿で示す論稿の多く、その一つひとつの記録には、場合によってはその〈陰影〉から、教師等の苦悶・格闘、〈教育〉の真実の姿、新たな「教育文化」の創出の兆し、あるいはこれまで「東北」で継承されてきた教育文化の現れ、大切にされるべき子ども観・教育への視座の存在

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

を見取ることができる。その足跡の一つは今後、後々において確実に繰り返し見定められ、問い返されねばならないであろう、「3・11後の教育実践」が提起していた政治・社会的な課題を幅広く、深く考究することに連なる礎、教育の根本を考えるための「財産」の一筋ともいえる。彼ら地域の現場教師＝当事者の声を、それが僅か一部の教師のものであったにせよ、その中にある優れた見識と貴重な営為、苦闘と悲嘆を事実として、教育研究の場で、教育研究の立場から受け止めねばなるまい⁹⁾。こうした前提に立って、ここでは、未熟な中間報告・未定稿に留まるものではあるが、書誌の整理・記述の公表を先ず試みたい。

なお、以下、論稿各著者の、当該論稿執筆当時の所属・肩書等（執筆当時の所属校（の所在市町村）名・学校種・職名等）を、基本的にその論稿中の表記に従い（一部補足し）、氏名の後に記載した。各雑誌各号の特集名も、論稿主題に関わる点からあわせて適宜記載した。

2. 岩手県・「被災地」の教師等による論稿

(1) 地域・学校・子ども等の現状報告、活動・取り組みの記録、教育実践記録、等

〈2011年度〉

- ・伊勢勤子（県立高田高校）「〈特集 東日本大震災・高校生に学びの保障を一②（岩手） 甦れ高高（たかこう）—大震災を乗り越えて—」日高教・高校教育研究委員会編『季刊 高校のひろば』No.80, 2011年6月
- ・「〈特集2・3・11 東日本大震災と教師たち〉 全生研MLの交信記録／3・13～4・6」全国生活指導研究協議会編『生活指導』No.692, 2011年7月（*各県教師の発信・記録。関連：井本傳枝（同誌編集部）『東日本大震災』全生研MLその後』『生活指導』No.694, 2011年9月）
- ・大内国芳（県立水沢高校・岩手民教連副委員長）「〈特集 東日本大震災 学校・教育は今〉 [被災地から 岩手] 教育の原点に立ち返りめざす学校・地域の再生」クレスコ編集委員会・全日本教職員組合編『クレスコ』No.124, 2011年7月
- ・濱口智（陸前高田市立広田小学校）「〈特集 東日本大震災と教師・子どもたち(1)一現地からの報告一〉 [岩手より-1] 大震災の被災、仲間からの支援、そして現在の私たち』『生活指導』No.695, 2011年10月
- ・澤野郁文（一関市立山目小学校）「〈特集 東日本大震災と教師・子どもたち(1)一現地からの報告一〉 [岩手より-2] 勝手にながら…チーム『立ち上がれ！内陸！三陸を救え！』プロジェクト』『生活指導』No.695, 2011年10月
- ・三上拓郎（岩手・津軽っ子ネットワーク代表）「〈震災関連特別寄稿〉 津軽っ子ネットワーク』『生活指導』No.695, 2011年10月
- ・片山直人（釜石市立小佐野小学校）「〈特別報告 現地東北からのレポート〉 子どもたちと未来を語る—岩手・釜石からの報告—」（新しい絵の会編『美術の教室』No.91, 2011年11月）
- ・豊巻浩也（岩手県教組委員長）「〈特集 大震災と教育復興にむけて〉 被災地からの報告 『どんなところ』に大津波はやって来たのか」教育文化総合研究所編『教育と文化』No.65, 2011年12月
- ・平野美代子（釜石市立釜石東中学校教諭）「〈特集 地震・災害に遭遇した子どもたち〉 恐怖におののきながらも、日頃の訓練通りに整然と避難』『食べもの文化』No.440, 2012年1月
- ・佐藤昭彦（気仙沼市立松岩小学校／陸前高田市在住）「〈連載 東日本大震災の被災地から②岩手〉 東日本大震災の教訓一言い伝えと二つのバイアス—」歴史教育者協議会編『歴史地理教育』No.785, 2012年2月
- ・佐藤昭彦（気仙沼市立松岩小学校）「〈特集 東日本大震災と子どもたち〉 どうする学校・保育所の間借り、移転、統廃合—岩手県—』『歴史地理教育』No.786, 2012年3月
- ・青澤弘明（岩手・胆江サークル）「〈700号記念に寄せて〉 『授業』における集団づくりと『生活』における集団づくり』『生活指導』No.700, 2012年3月
- ・平野美代子（釜石東中学校）「〈実践の広場 手をつなぐ—教師・親・地域の人々— いっぱい飲んで、いっぱい語って、いっぱい笑いました！』『生活指導』No.700, 2012年3月
- ・大内国芳（県立水沢高校）「〈小特集 東日本大震災からの復興に向けて(3) —①〉 復興への希望を示す高校生の交流—『講座』と『交流会』の感想から—』『高校のひろば』No.83, 2012年3月

土 屋 直 人

- ・嶋崎幸子(宮古市立田老第一中学校教諭)「〈子どもの育ちと暮らしの現場から〉[1-1 岩手 中学校] きみたちに教わること―田老町には輝く笑顔の中学生がいる―」(「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク編『大震災と子どもの貧困白書』かもがわ出版, 2012年3月, 所収)
- ・濱ゆり(公立小学校養護教諭)「〈子どもの育ちと暮らしの現場から〉[1-2 岩手 小学校保健室] 今を生きる子どもたちとともに―3・11 前も後も変わらない子どもと家庭への見守り―」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)
- ・湊大(公立中学校教諭)「〈1 岩手 貧困を考える〉 低所得の町に生きる―教育現場の荒廃がもたらす町の貧困と子どもたち―」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)

〈2012 年度〉

- ・森本晋也(岩手県歴教協)「〈Ⅱ 震災からの復興をめざして〉 海と共に生きる―釜石市鶴住居地区の現状と復興に向けた取り組み―」『歴史地理教育(7月増刊号 原発震災後の日本―地域・授業・研究―)』No. 792, 2012年7月
- ・村上貴美子「〈特集2 東日本大震災の1年半後にあって―養護教諭としてできること―〉 震災から1年半が過ぎた被災地で」(日本学校健康相談学会編『学校健康相談研究』第9巻第1号, 2012年10月)
- ・濱口智(陸前高田市リトル学童クラブ事務局)「東日本大震災と学童保育―岩手・陸前高田から―」(学童保育指導員専門性研究会編『学童保育研究』No. 13, 2012年11月)
- ・平野美代子(釜石市立釜石東中学校)「震災があったことを忘れないで欲しい―3・11 東日本大震災から2年―」『食べもの文化』No. 456, 2013年3月

〈2013 年度〉

- ・嶋崎幸子(宮古市立田老第一中学校)「〈特集1 教師を生きる哲学⑦〉[実践] 地域に育てられ、地域で生きていく子どもたち」教育科学研究会編『教育』No. 807, 2013年4月
- ・片山直人(釜石市立小佐野小学校)「〈実践報告 小学校〉 雪だあ!―表現するおもしろさ、喜びを感じさせたい―」『美術の教室』No. 94, 2013年5月
- ・「〈特集 地域、子どもが生きる場所② [インタビュー] 岩手・沿岸被災地域に生きる子どもたち〉 元岩手県宮古市立田老第一中学校・岩手県山田町立豊間根中学校 嶋崎幸子さんに聞く」『教育』No. 810, 2013年7月
- ・「〈特集 地域、子どもが生きる場所② [インタビュー] 岩手・沿岸被災地域に生きる子どもたち〉 岩手県野田村立野田小学校 田屋保子さんに聞く」『教育』No. 810, 2013年7月
- ・濱ゆり(公立小学校・養護)「〈特集1 教育費『貧乏物語』⑦〉[報告] 被災地で子どもの暮らしをサポートする」『教育』No. 813, 2013年10月
- ・鈴木哲史(県立葛巻高校)「〈特集 〈3・11〉から3年―被災地の現在から考える〉 [岩手からの報告] 被災地の未来、岩手の未来のためにゆきとどいた教育の実現を」『クレスコ』No. 156, 2014年3月

〈2014 年度〉

- ・濱口智(気仙地区学童クラブ連絡協議会事務局長)「〈特集1 子どもと教師の放課後・夏休み〉 津波被災地の学童保育クラブから」『教育』No. 822, 2014年7月
- ・菊池恵理(小学校)「『温度差』をこえて」『歴史地理教育(3月増刊号 3・11と「東北」の未来)』No. 832, 2015年3月
- ・伊勢勤子(県立高校・定時制)「〈特集 〈3・11〉から4年 学び、発信し、行動する〉(岩手からの報告) 東日本大震災被災地にある高校に勤務して」『クレスコ』No. 168, 2015年3月
- ・濱口智(気仙地区学童クラブ連絡協議会事務局長)「〈被災地の子どもたちは今 津波被災地 学童・高校・ひきこもり相談の現場から〉 学童保育の現場から」『女性のひろば』No. 433, 2015年3月
- ・伊勢勤子(大船渡高校定時制教諭)「〈被災地の子どもたちは今 津波被災地 学童・高校・ひきこもり相談の現場から〉 いつまでも生徒たちとともに」『女性のひろば』No. 433, 2015年3月
- ・「支え合う人々 みやこ自立サポートセンター・教育支援チーム『まつ』のみなさんに聞く」『女性のひろば』No. 433, 2015年3月

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

〈2015年度〉

- ・濱口智(小学校)「〈東日本大震災から4年—子ども・学校・地域のいま— 特別報告1〉 岩手の子どもたちは、いま—岩手からの報告—」『生活指導』No.719, 2015年4/5月
- ・高橋克典(岩手県教職員組合・中央執行副委員長)「〈特集 東日本大震災と原発事故から5年—被災地の学校現場から— 1岩手〉 最優先すべきことは何なのだろうか」『教育と文化』No.82, 2016年2月
- ・平野美代子(山田町立豊間根中学校)「〈特集 いのちを尊ぶ学び—東日本大震災から5年—〉 [岩手からの報告] 被災校での勤務を通して考える釜石の復興」『クレスコ』No.180, 2016年3月

〈2016年度〉

- ・片山直人(小学校)「〈特集 子どもたちの願いと要求に根ざす集団づくりの世界〉 汀に咲く」『生活指導』No.730, 2017年2/3月

なお、あわせて、関連した文献として、県高教組が編集した次の資料がある。

- ・岩手県高等学校教職員組合編『2011 東日本大震災 語り継ぐ3.11—その時学校は—そして—』2012年3月 (<http://www.jtu-iwako.jp/katari311/index.html>にて閲覧可能)

(2) 佐々木宏記氏(宮古市・小学校)の教育実践記録

岩手の小学校教師・佐々木宏記氏は、内陸勤務から被災地勤務を志望して2011年度から加配教員として沿岸の宮古市立赤前小学校に赴任。地域や教師の実態を独特の視座から鋭く見つけ、地域のなかの学校のあり方を問うなど、独自の考察と展望を述べ、子どもの声を聴き、寄り添う働きをした記録を書き残している⁶⁾。2013年3月、定年前に退職。

- ・佐々木宏記(公立小学校)「〈特集 震災と教育⑥〉 今、被災地は…〈岩手県宮古市からの報告〉」『教育』No.792, 2012年1月
- ・佐々木宏記(小学校教員)「海に生き、海に学ぶ—宮古からの報告—」(地域民主教育全国交流研究会・坂元忠芳編『シリーズ現代と教育 東日本大震災と子ども・教育—震災は私たちに何を教えるか—』桐書房 2012年3月, 所収, 第1章第1節)
- ・佐々木宏記(公立小学校)「〈シリーズ 被災地の子どもと学校〉 被災以降に『地域の学校』となった」『教育』No.803, 2012年12月
- ・佐々木宏記(公立小学校教員)「〈特集 〈3.11〉から2年—子どもたちの願いから考える学校・教育のあり方— [被災地から—岩手—] 被災地で生きる人たちとともにつくる学びと希望—震災から何を学ぶのか—」『クレスコ』No.144, 2013年3月
- ・佐々木宏記(元公立小学校教員)「〈第1章 学校とは、学力とは—被災地で問われたこと—〉 なぜ夏祭りを学校でやるのか—岩手・沿岸部における学校と復興教育—」(教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第5巻 3・11と教育改革』かもがわ出版, 2013年12月, 所収)

3. 宮城県・「被災地」の教師等による論稿

(1) 地域・学校・子ども等の現状報告, 活動・取り組みの記録, 教育実践記録, 等

〈2011年度〉

- ・大木一彦(仙台市立中学校)「東日本大震災を体験して」『教育』No.785, 2011年6月
- ・瀬成田実(宮城県教職員組合)「〈緊急特集 3・11 東日本大震災と教育の課題〉 被災地宮城県の教育現場から—『人事問題』を中心に—」民主教育研究所編『季刊 人間と教育』No.70, 2011年6月
- ・渡辺孝之(東松島市立浜市小学校)「〈緊急特集 3・11 東日本大震災と教育の課題〉 東日本大震災—大津波直撃の学校から—」『人間と教育』No.70, 2011年6月

土 屋 直 人

- ・佐藤春治（宮城高教組災害対策本部長）「〈特集 東日本大震災・高校生に学びの保障を—④（宮城） 大震災に立ち向かい乗り越えるために—今こそ修学保障に経済的支援を！—」『高校のひろば』No.80, 2011年6月
- ・瀬成田実（宮教組書記長・中学校）「〈特集 東日本大震災 学校・教育は今〉〔被災地から 宮城・組合〕宮城県の教育現場は今—憲法・子どもの権利条約にのっとった教育を—」『クレスコ』No.124, 2011年7月
- ・高橋正行（県高校・障害児学校教組委員長）「〈特集 東日本大震災 学校・教育は今〉〔被災地から 宮城・高校〕震災後の宮城における高校の現状と課題」『クレスコ』No.124, 2011年7月
- ・佐久間徹（宮城高教組障害児学校部長）「〈特集 東日本大震災 学校・教育は今〉〔被災地から 宮城・障害児学校〕震災から2カ月 学校に子どもたちが戻るまで」『クレスコ』No.124, 2011年7月
- ・一戸富士雄（宮城県歴教協）「〈地域—日本から世界から191〉 東日本大震災の歴史的大惨事を東北（宮城）から考える」『歴史地理教育』No.778, 2011年8月
- ・佐藤秀寿（宮城作文の会・黒川郡大和町立鶴巣小学校）「〈特別企画 東日本大震災 子どもは、学校は〉あの満天の星空を、私は忘れない」日本作文の会編『作文と教育』No.780, 2011年8月
- ・千葉保夫（大学非常勤講師）「宮城からの報告（1）震災・巨大津波と学校・子ども・地域」『教育』No.788, 2011年9月
- ・渡辺孝之（東松島市立浜市小学校）「宮城からの報告（2）大津波直撃の学校で私たちはどう行動したか」『教育』No.788, 2011年9月
- ・佐藤昭彦（気仙沼市立松岩小学校）「〈子どもの目〉友達が増えたよ」『歴史地理教育』No.779, 2011年9月
- ・佐藤昭彦（気仙沼市立松岩小学校）「〈特集 東日本大震災と教師・子どもたち（1）—現地からの報告—」〔宮城より-1〕『学校って、本来何をしなければならないのか—東日本大震災下で考えたこと—』『生活指導』No.695, 2011年10月
- ・藤坂雄一（石巻市立釜小学校）（*被災時：石巻市立雄勝小学校）「〈特集 東日本大震災と教師・子どもたち（1）—現地からの報告—」〔宮城より-2〕町が消えたあの日のこと。そして、あの日からのこと」『生活指導』No.695, 2011年10月
- ・佐々木大介（仙台サークル・小学校）「〈特集 東日本大震災と教師・子どもたち（2）—教育、生活指導の課題を問う—」〔生活の復興と生活指導の課題 全生研第53回全国大会自主集会「東日本大震災と教師・子ども」報告者から〕東日本大震災—宮城で起きていること—」『生活指導』No.696, 2011年11月
- ・千葉健一（石巻市立女子商業高校）「〈特集 若い教師たちの教育実践〉〔被災地の高校生と〕石巻で学びつづける高校生とともに—東日本大震災から半年が経って—」『クレスコ』No.128, 2011年11月
- ・瀬成田実（宮城県教職員組合書記長）「〈特集 復興の課題 いま何が問題なのか—東日本大震災から10ヵ月を経て—被災地宮城の子どもたちの現状と課題」日本民主法律家協会編『法と民主主義』No.464, 2011年12月
- ・麻生川敦（南三陸町立戸倉小学校校長）「〈特集 震災と教育④〉 子どもに日常をとり戻す復興のとりくみ」『教育』No.792, 2012年1月
- ・平山正之（宮城県歴教協）「〈連載 東日本大震災の被災地から①宮城〉 息子を探して」『歴史地理教育』No.784, 2012年1月
- ・大木一彦（仙台市立上杉山中学校）「〈特集Ⅰ 教育実践報告②（第11分科会「学校づくり」）〉 東日本大震災と子ども、学校—仙台市の中心部の学校に勤務する一中学校教師の目から見て—」『教育』No.793, 2012年2月
- ・鎌田克信（石巻市立向陽小学校）「〈特集Ⅰ 教育実践報告⑤（第4分科会「身体と教育」）〉 『いのち』について考える—つながっている つながってきた つながっていく—」『教育』No.793, 2012年2月
- ・関合子（公立小学校）「〈特集Ⅰ 教育実践報告⑦（第5分科会「美的能力と教育」）〉 『哲学する』学びとの出会い—特別支援学級で学んだこと—」『教育』No.793, 2012年2月
- ・石垣好春（石巻市立北村小学校）「〈特集 震災と漁業〉 被災地石巻から漁業問題を考える」『歴史地理教育』No.785, 2012年2月
- ・瀬成田実（宮城県教組書記長・宮城県生研）「〈教育情報〉 震災後8ヶ月—宮城県の学校現場の状況—」『生活指導』No.699, 2012年2月
- ・千葉久美子（宮城県石巻高校養護教諭）「2 生命を守る砦として—震災時における保健室と養護教諭の役割—」（日本学校教育学会「東日本大震災と学校教育」調査研究プロジェクト編『東日本大震災と学校教育—震災は学校をどのように変えるのか—』かもがわ出版, 2012年2月, 所収）

3-11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

- ・高橋正行(柴田農林高校)「〈特集Ⅰ 若者と貧困・就活・仕事④〉大震災が問いかけた学ぶこと、働くこと—確かな就職保障の実現をめざして—」『教育』No.794, 2012年3月
- ・賀屋義郎(東日本大震災復興支援みやぎ県民センター事務局次長)「〈特集 東日本大震災と日本の教育〉被災地の教育と学校・地域の再生」『人間と教育』No.73, 2012年3月
- ・中寛(亶理町立荒浜小学校)「〈特集 東日本大震災と子どもたち〉学校再生への一歩—宮城県—」『歴史地理教育』No.786, 2012年3月
- ・一戸富士雄(宮城県歴教協)「東日本大震災・福島原発事故を戦後史の中でとらえる」(歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報 2011年版 東日本大震災と民主主義の課題』三省堂, 2012年3月, 所収)
- ・佐藤昭彦(気仙沼市・小学校)「東日本大震災と三陸地域—気仙沼と陸前高田の現状—」(歴教協編『歴史教育・社会科教育年報 2011年版』三省堂, 2012年3月, 所収)
- ・高橋正行(宮城県高校・障害児学校教組執行委員長, 柴田農林高校教諭)「〈子どもの育ちと暮らしの現場から〉[1-9 宮城 高等学校] 給付制奨学金は1本の命綱—いっそう広がる経済格差, 若者が地域復興を担える手立てを—」(「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク編『大震災と子どもの貧困白書』かもがわ出版, 2012年3月, 所収)
- ・千葉久美子(石巻高校養護教諭)「〈子どもの育ちと暮らしの現場から〉[1-11 宮城 高等学校保健室] 高校生も担った地域の医療拠点・保健室—地域に安心・安全な居場所をつくる生徒・職員集団の力—」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)
- ・安達喜美子(宮城県保育関係団体連絡会)「〈子どもが生きるための権利保障〉[2-2 宮城 保育所] ライフラインとしての公的保育—震災を通して保育の公的保障を考える—」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)
- ・池川尚美(宮城県学童保育緊急支援プロジェクト)「〈子どもが生きるための権利保障〉[2-4 宮城 学童保育] 壊された子どものあたりまえの生活—あぶり出された学童保育事業の貧困—」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)
- ・芳賀直(宮城県学校事務職員制度研究会)「〈子どもが生きるための権利保障〉[2-5 宮城 就学援助] 義務教育を完全無償に一就学援助での対応には限界—」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)

〈2012年度〉

- ・坂本謙(大河原町立大河原小学校)「〈子どもの目〉 新聞記事への思い」『歴史地理教育』No.789, 2012年5月
- ・千葉保夫(大学非常勤講師)「エッセイ 東日本大震災の宮城の教師たち」『人間と教育』No.74, 2012年6月
- ・及川薫(東日本大震災復興・復興支援みやぎ県民センター事務所長)「〈Ⅱ震災からの復興をめざして〉被災地での雇用確保のたたかい」『歴史地理教育(7月増刊号 原発震災後の日本—地域・授業・研究—)』No.792, 2012年7月
- ・手代木彰雄(宮城県歴教協)「〈Ⅱ震災からの復興をめざして〉被災から一年が過ぎて(宮城)」『歴史地理教育(7月増刊号)』No.792, 2012年7月
- ・高橋誠(宮城県歴教協)「〈Ⅱ震災からの復興をめざして〉東日本大震災から一年, 宮城の学校で何が起きていたか」『歴史地理教育(7月増刊号)』No.792, 2012年7月
- ・高橋治彦(宮城県高校・障害児学校教組書記長)「〈特集 お金の心配なく学べる社会に〉[被災地から] 『給付制奨学金』で子どもたちの学びを支えよう—被災地・宮城からの報告」『クレスコ』No.136, 2012年7月
- ・菊池英行(元宮城県高校)「〈特集Ⅰ 〈復興〉の教育学③〉[報告] 『石巻地域』の被災の現状といま」『教育』No.799, 2012年8月
- ・山内裕子(元気仙沼市立岩月保育所勤務)「〈特集 子どもの声, 親の声を聴き取る〉[実践Ⅰ] 3-11 岩月のこどもたち」『生活教育』No.766, 2012年9月
- ・春日辰夫(みやぎ教育文化研究センター所長)「〈地域教育研究所から 連載①〉宮城教育文化センター 3-11 後 どんな歩みをしているか」『人間と教育』No.75, 2012年9月
- ・瀬成田実(宮教組書記長)「〈東日本大震災をおもう 第11回〉『教職員がつづる東日本大震災』を発行して」『クレスコ』No.138, 2012年9月
- ・高橋正行(柴田農林高校)「〈小特集 東日本大震災からの復興に向けて(5)—②〉震災から一年半 宮城の現状と今後の課題」『高校のひろば』No.85, 2012年9月

土 屋 直 人

- ・佐藤昭彦(気仙沼市立松岩小学校)「〈被災地からの報告〉震災復興は今」『歴史地理教育(11月増刊号)』No.797, 2012年11月
- ・石垣好春(石巻市立北村小学校)「震災後五〇〇日、子どもと学校の現状—宮城県石巻地方を中心に—」(歴教協編『歴史教育・社会科教育年報 2012年版』三省堂, 2012年12月, 所収)
- ・千葉健一(石巻市立女子商業高校)「〈小特集 東日本大震災からの復興に向けて(6) —①〉被災校の進路状況について」『高校のひろば』No.86, 2012年12月
- ・瀬成田実(宮城県教組)「〈いま学校で〉被災地の学校はいま」『教育』No.804, 2013年1月
- ・豊田樹也(古川高校技師)「〈特集 学校教育を「儲け」の対象にしているのか?〉[宮城・現業職員]東日本大震災で再確認した現業職員の役割の大切さ—」『クレスコ』No.142, 2013年1月
- ・大木一彦(仙台市立上杉山中学校)「〈シリーズ震災と教育 第3回〉被災地の学力と進路(被災地の子どもを数値で追い込む新入試制度)」『人間と教育』No.77, 2013年3月
- ・森達(亘理町立荒浜中学校教員)「〈特集 (3.11)から2年 子どもたちの願いから考える学校・教育のあり方〉[被災地から 宮城]被災地の中学生在が希求する学校像・生徒像—地域の再生とともに—」『クレスコ』No.144, 2013年3月

(2013年度)

- ・本郷弘一(宮城県歴教協)「〈特集 生活保護をもっと豊かに〉生活保護の現状と課題—宮城から—」『歴史地理教育』No.804, 2013年5月
- ・穴戸保子(白石市立深谷小学校)「〈特集 地域、子どもが生きる場所⑥〉[実践]地域を舞台に全校創作オペレッター—震災体験を乗り越えて—」『教育』No.810, 2013年7月
- ・鹿野善照(宮城県歴教協)「〈地域—日本から世界から 215/216〉東松島市の仮設住宅から (前)・(後)」『歴史地理教育』No.809~810, 2013年9月~2013年10月
- ・熊谷賀世子(仙台市立生田小学校)「〈小学校の授業 6年/総合的な学習の時間〉震災を考える—つながろう宮城の子—(上)・(下)」『歴史地理教育』No.810~No.811, 2013年10月~2013年11月
- ・平山隆之(宮城県歴教協)「震災, 間借り, 統合—震災から二年半の学校生活—」(歴教協編『歴史教育・社会科教育年報 2013年版』三省堂, 2013年12月, 所収)
- ・鎌田雅子(石巻市立門脇小学校)「〈特集1 3・11 3年目を生きる①〉[宮城] 『先生がいるからね』—子ども・親の不安に何ができるのか—」『教育』No.818, 2014年3月
- ・鎌田克信(石巻市立向陽小学校)「〈特集1 3・11 3年目を生きる②〉[宮城] 子どもたちの『声なき声』に耳を傾けながら」『教育』No.818, 2014年3月
- ・伊藤慶(公立小学校)「〈特集 (3・11)から3年—被災地の現在から考える〉[宮城からの報告] 子どもたちをじっくり見て, 支えたい—被災3年を振り返って思うこと—」『クレスコ』No.156, 2014年3月
- ・平居高志(県立高校)「〈特集 (3・11)から3年—被災地の現在から考える〉[宮城からの報告] 海沿いの水産高校での3年間—被災校で見える人間の光と影—」『クレスコ』No.156, 2014年3月

(2014年度)

- ・佐藤秀寿(公立小学校)「〈特集 いま過酷な現場に立つ先生に, 喜びと希望を〉子どもたちに寄り添い, 励ますことができる教師でありたい」『作文と教育』No.813, 2014年5月
- ・佐竹達郎(公立小学校)「〈いま, 教室で その8〉あの時のあの実践を見つめて—被災地における『まちたんけん』を通して—」『人間と教育』No.82, 2014年6月
- ・渡辺孝之(公立小学校)「〈特集 学校統廃合は, いま〉(宮城からの報告) 被災地での統廃合の現状と課題」『クレスコ』No.163, 2014年10月
- ・桑山紀彦(名取市・認定NPO法人「地球のステージ」/診療内科医)「〈特集 忘れていませんか, 3・11〉[実践2] 記憶に支配されるのではなく, 記憶を支配する」『生活教育』No.794, 2015年1月
- ・佐藤春治(宮城県平和委員会)「〈Ⅱ「震災後」を生きる—震災・津波・原発と地域—〉大震災で見えた自衛隊・米軍」『歴史地理教育(3月増刊号 3・11と「東北」の未来)』No.832, 2015年3月
- ・坂本謙(柴田町立船岡小学校)「学校現場で問われる心の再生」『歴史地理教育(3月増刊号)』No.832, 2015年3月
- ・國吉尚美(元仙台市立太白小学校)「〈Ⅲ子どもたちが学ぶ震災後の「東北」〉[実践 小学校] 石巻市の漁業・復興への努力」『歴史地理教育(3月増刊号)』No.832, 2015年3月

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

- ・日下かおり（県立高校）「〈特集 3・11〉から4年 学び、発信し、行動する」〈宮城からの報告〉生徒らの苦しみ、悲しみを汲み上げることを忘れずに『クレスコ』No.168, 2015年3月

〈2015年度〉

- ・藤坂雄一（小学校）「〈東日本大震災から4年—子ども・学校・地域のいま— 特別報告2〉 つながりのなかで考えたい みんなが幸せになることを—宮城からの報告—」『生活指導』No.719, 2015年4/5月
- ・高橋正行（宮城県高校・障害児学校教組委員長、柴田農林高校）「〈シリーズ震災と教育 第11回〉 東日本大震災から4年半 宮城の現状」『人間と教育』No.87, 2015年9月
- ・阿部洋子（石巻西高校司書）「〈特集 いのちを尊ぶ学び—東日本大震災から5年—」[宮城からの報告] 自分で歩み始めるまでそっと見守って」『クレスコ』No.180, 2016年3月

〈2016年度〉

- ・堀籠智加枝（小学校）「〈北から南から〉5年目の3・11—『命』の輝きを書く—」『生活教育』No.811, 2016年6月
- ・瀬成田実（七ヶ浜町立向洋中学校）「〈特集 「場」をつくり発信する子ども・若者たち〉[実践2] 震災総合学習 『震災からの復興—七ヶ浜を考える—』『生活教育』No.812, 2016年7月
- ・加藤正伸（柴田町立槻木小学校）「〈小学校の授業 3年〉 かまぼこ工場の学習から震災の学習へ」『歴史地理教育』No.851, 2016年7月
- ・瀬成田実（七ヶ浜町立向洋中学校）「〈特集2 いま、教育の論点に迫る〉 震災を学ぶ総合学習」『教育』No.847, 2016年8月（*関連：佐藤広美「〈特集2 いま、教育の論点に迫る〉 震災を語り合い 悲しみを共有する意味」同上）

また関連して、現場教師が自らの体験や思いを綴った文章や発言等を、県教組が編集・集めた「提言集」（計3冊）、みやぎ教育文化研究センターの発行物等がある。

- ・みやぎ教育文化研究センター・日本臨床教育学会震災調査準備チーム編『3・11 あの日のこと、あの日からのこと—震災体験から宮城の子ども・学校を語る—』かもがわ出版, 2011年9月
- ・『南三陸・戸倉小学校 3・11 決死の避難から 善王寺（登米市）までの道を語る』（冊子）（発行：みやぎ教育文化研究センター, 2012年3月）
- ・宮城県教職員組合編『教職員がつづる東日本大震災—学校で何があったのか 語りたい、残したい、伝えたいこと— 第1集』2012年3月
- ・宮城県教職員組合編『教職員がつづる東日本大震災—学校で何があったのか 語りたい、残したい、伝えたいこと— 第2集』2012年6月
- ・宮城県教職員組合編『東日本大震災 教職員が語る子ども・いのち・未来—あの日、学校はどう判断し、行動したか—』明石書店, 2012年10月（※上記2冊の集成）
- ・宮城県教職員組合編『子どもの「いのち」を守り抜くために 東日本大震災を心に刻む—学校で何があったのか 語りたい、残したい、伝えたいこと—（第3集）』2014年9月
- ・みやぎ教育文化研究センター発行『センターつうしん』各号（冊子）

(2) 阿部広力氏（亶理郡山元町・小学校）の教育実践記録

阿部広力氏は、3.11 震災当時、亶理郡山元町立山下第二小学校に勤務しており、学校で津波被災に遭った。その後、山下第一小学校に転勤して後、学校生活の建て直しを経る中で、2011年度から2013年度にかけて、「稲むらの火」の学習と劇化、その後、子らや地域の皆に避難を呼びかけ津波に流された役場職員らの「命の呼びかけ」の劇化など、「ふるさとの復興」と「心の復興」に向けての学習・表現活動などの、独自の実践を重ねてきた⁷⁾。

- ・阿部広力(前山元町立山下第二小学校)「雪のなか銀紙にくるまり抱き合って過ごした」(みやぎ教育文化研究センター・日本臨床教育学会震災調査準備チーム編『3・11 あの日のこと、あの日からのこと—震災体験から宮城の子ども・学校を語る—』かもがわ出版, 2011年9月, 所収)
- ・阿部広力(巨理郡山元町立山下第一小学校)「〈特集 3・11 震災, 原発事故に向き合う子ども・教師・父母〉特別報告 ふるさとの復興を考える—津波から村を救った『稲むらの火』の劇化を通して—」『生活教育』No. 761, 2012年4月
- ・阿部広力「〈連載 東日本大震災の被災地から⑩宮城〉仮設住宅の子どもたちは、いま」『歴史地理教育』No. 795, 2012年10月
- ・阿部広力(前山元町立山下第二小学校)「ふるさとの復興を考える—『稲むらの火』の劇化を通して—」(宮城県教職員組合編『東日本大震災教職員が語る子ども・いのち・未来—あの日, 学校はどう判断し, 行動したか—』明石書店, 2012年10月, 所収)
- ・阿部広力「〈小学校の授業 小3・社会・総合〉ふるさとと心の復興を考える—防災マップ作りと『命の呼びかけ』の実践を通して—」『歴史地理教育』No. 809, 2013年9月
- ・阿部広力(公立小学校)「〈特集 地域に生きる 地域で育つ〉[被災地のとりくみ] ふるさとと心の復興を考える—防災マップづくりと『命の呼びかけ』の実践を通して—」『クレスコ』No. 154, 2014年1月
- ・阿部広力(公立小学校)「〈特集1 3・11 3年目を生きる③〉[宮城] 津波によって失った自由を取り戻す」『教育』No. 818, 2014年3月
- ・阿部広力(公立小学校教員)「〈特集 平和・いのちの学習を今こそ—憲法・原発・震災・沖縄—〉『3・11』3年目を生きた子どもと教師—ふるさとと心の復興を考える—」『作文と教育』No. 816, 2014年8月

(3) 制野俊弘氏(東松島市・中学校)の教育実践記録

制野俊弘氏は、3・11時、東松島市立鳴瀬第二中学校(2013年4月に鳴瀬第一中と統合後、鳴瀬未来中学校)の保健体育科教師。震災後、津波被災の渦中、生徒が自己の内面・苦難などを書き綴らせることを実践し、2014年度には『命とは何か』を問う授業を公開。学校体育研究同志会に所属、運動会に取り組む実践、鎮魂の大森「みかぐら」実践など多様な実践を展開・発表した⁸⁾。2014年度の実践の一部は、NHKスペシャル「命と向きあう教室—被災地の15歳・1年の記録—」(2015年3月25日)で放映された。2016年3月、中学校教諭を退職。

- ・制野俊弘(東松島市立鳴瀬第二中学校)「〈特集 東日本大震災 学校・教育は今〉[被災地から 宮城・中学校] 生きるのに必死の2カ月間 今, 子どもたちのために前へ」『クレスコ』No. 124, 2011年7月
- ・制野俊弘「〈特別連載〉被災地の子どもに向き合う体育実践〈1〉～〈21〉」『体育科教育』2011年12月号～2013年9月号(*2013年10月号(連載第22回目)には久保健との対談)
- ・制野俊弘「〈特集 震災から何を学ぶのか—地域に根ざしつながりあう体育実践—」[実践記録] 学校を人間と地域の再生の場—狼煙とともに—」学校体育研究同志会編『たのしい体育・スポーツ』No. 258, 2012年1・2月合併号
- ・制野俊弘「〈特集2 大震災と向き合う教育実践〉学校を人間と地域の再生の場—狼煙(のろし)とともに—」『人間と教育』No. 73, 2012年3月)
- ・制野俊弘「〈特集 生きる場の編み直し—集う場としての演劇—」[実践報告 中学校] 人間と地域の再生は学校から」(日本演劇教育連盟編『演劇と教育』第647号, 2012年8・9月合併号)
- ・制野俊弘「〈学校選択制・学校統廃合は, 今〉[高校統廃合 宮城] 東日本大震災被災地における学校統廃合の動き—学校再生による地域づくりを—」『クレスコ』No. 139, 2012年10月
- ・制野俊弘「〈実践のひろば〉 浜っ子たちと野球—俺はここに残って野球をしたい—」『たのしい体育・スポーツ』No. 265, 2012年10月号
- ・制野俊弘「学校を地域と人間の再興の場—大津波後の学校で子どもと創る教育の営み—」(宮城県教職員組合編『東日本大震災教職員が語る子ども・いのち・未来—あの日, 学校はどう判断し, 行動したか—』明石書店, 2012年10月, 所収)
- ・制野俊弘「〈特別連載 震災と保育〉運動会実践・五三四七人の軌跡—『地域』とともにある学校を求めて—」全国保育問題研究協議会編『季刊 保育問題研究』No. 261, 2013年6月
- ・制野俊弘(中学校)「〈特集 学校づくりの新たな可能性をさぐる〉『生きづらさ』の極と対峙する—文化の創造的主体者を育てる—」『生活指導』No. 710, 2013年10/11月

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

- ・制野俊弘（公立中学校教諭）「〈第1章 学校とは、学力とは一被災地で問われたこと〉 みかぐら『荒くずし』に見る生と祈り—東松島・この小さく、ローカルなもの—」（教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第5巻 3・11と教育改革』かもがわ出版、2013年12月、所収）
- ・制野俊弘（鳴瀬未来中学校）「〈特集1 現代の思春期と中学校⑤〉[実践] 中学生、震災のなかを生きる』『教育』No.816、2014年1月
- ・制野俊弘「〈特集 いま、仲間と創る実践研究〉[実践研究1] 舞い舞わば舞いこそ静かにやわらかに—『みかぐら』と出会った子どもたち—』『たのしい体育・スポーツ』No.278、2014年1・2月合併号
- ・制野俊弘「〈我が実践を語る〉 地域の生活にねざし、文化研究に基づいた、みんなでつくる実践』『たのしい体育・スポーツ』No.288、2015年1・2月合併号
- ・制野俊弘（公立中学校）「〈特集 〈3・11〉から4年 学び、発信し、行動する〉〈宮城からの報告〉 子どもの生きづらさはまだ終わっていない—『忘れられた子どもたち』にしないために—』『クレスコ』No.168、2015年3月
- ・制野俊弘「〈実践のひろば〉 子どもとともに『「命」とは何か』を問う授業』『たのしい体育・スポーツ』No.292、2015年6月
- ・制野俊弘「綴ることは生きること—被災地の子どもに綴らせることの意味—』『作文と教育』No.827、2015年7月
- ・制野俊弘「中学生とともにつくる授業・学級・学校」（片岡洋子・久富善之・教育科学研究会編『教育をつくる 民主主義の可能性』旬報社、2015年8月
- ・制野俊弘「子どもたちの揺れる心を聴き合う教育実践と教師—『「命」とは何か』を問う授業から—』日本臨床教育学会編『臨床教育学研究』第4号（特集 東日本大震災と臨床教育学の課題—当事者の「声」に耳を傾けて—）、2016年3月
- ・制野俊弘『命と向きあう教室』ポプラ社、2016年5月（単著）
- ・制野俊弘「〈(隔月連載) 3.11 東北便り 私たちの「3.11」〉 鳴瀬だより（第1回～*）』『生活教育』No.798～、2015年5月～（* 2017年1月号の時点で連載第11回）

(4) 徳水博志氏（石巻市雄勝町・小学校）の教育実践記録

徳水博志氏は、3・11時、石巻市立雄勝小学校の元教諭。町域全体の津波被災、その数ヵ月後いち早く学校の新たな教育課程構想を出発させ、「被災地が求める教育」「故郷を復興する社会参加の学力」を主張し、喪失感を抱える子どもたちと共に「震災復興まちづくりプラン」作成や震災体験の表現、木版画「希望の船」制作等、「人とつながり希望を紡ぐ」多様な実践を展開した⁹⁾。2014年3月に退職後も「地域づくり」を視野に、雄勝ローズファクトリーガーデンの事業とともに、多面的な特質を持つ自身の教育実践を研究的に振り返り、展望を論じている。

- ・徳水博志（宮城文芸研）「〈緊急報告〉 地域の復興なくして、学校の再生なし—人とつながり、希望を紡ぐ—」（文芸教育研究協議会編『文芸教育』第95号、2011年9月）
- ・徳水博志（石巻市立雄勝小学校）「〈特別報告 現地東北からのレポート〉 被災地の教育の現状と復興に向けて」（新しい絵の会編『美術の教室』No.91、2011年11月）
- ・徳水博志「〈特集 学校ってなんだろう？—3・11が問いかけているこれからの学校—〉[実践1] 被災した学校の教育課題と教育課程づくり』『生活教育』No.757、2011年12月
- ・徳水博志「〈緊急報告〉 地域の復興なくして、学校の再生なし（Ⅱ）—地域復興と学校復興の歩み—』『文芸教育』第96号、2011年12月
- ・徳水博志「〈特集 新学期、新たな希望を—私たちがつくる教育〉[実践3] 被災した学校の教育課題と教育課程づくり そのⅡ』『生活教育』No.760、2012年3月
- ・徳水博志「〈特集 2 大震災と向き合う教育実践〉 被災地が求める教育は《希望の教育》 その学力とは—故郷を愛し、故郷を復興する社会参加の学力—』『人間と教育』No.73、2012年3月
- ・徳水博志（石巻市立雄勝小学校教員／宮教組石巻支部前執行委員長）「〈特集 〈3.11〉から1年 子どもたち・学校は今〉[宮城] 被災地の復興を担う教育観への転換を—『地域の復興なくして学校の再生はなし、学校の再生なくして地域の復興はなし』—』『クレスコ』No.132、2012年3月

- ・徳水博志「〈子どもが生きるための権利保障〉[2-6 宮城 地域と学校統廃合] 進む学校統廃合と住民運動—地域の復興なくして学校再建なし, 学校の再建なくして地域復興なし—」(「なくそう! 子どもの貧困」全国ネットワーク編『大震災と子どもの貧困白書』かもがわ出版, 2012年3月, 所収)
- ・徳水博志「〈緊急報告〉 地域の復興なくして, 学校の再生なし(Ⅲ)—被災校の教育課題と教育課程づくり—」『文芸教育』第97号, 2012年4月
- ・徳水博志「連載 3・11 東北便り 雄勝だより 人とつながり希望を紡ぐ(第1回~第30回)」『生活教育』No.761~No.795, 2012年4月~2015年2月
- ・徳水博志「地域の復興なくして学校の再生なしⅠ—人とつながり, 希望を紡ぐ—」(宮城県教職員組合編『東日本大震災教職員が語る子ども・いのち・未来—あの日, 学校はどう判断し, 行動したか—』明石書店, 2012年10月, 所収)
- ・徳水博志「地域の復興なくして学校の再生なしⅡ—被災した学校の教育課題と教育課程づくり—」(同上『東日本大震災教職員が語る子ども・いのち・未来』2012年10月, 所収)
- ・徳水博志「〈特集2 地域に生きる教師①〉 地域復興に貢献する学校をつくる」『教育』No.802, 2012年11月
- ・徳水博志「『生存』の足場を創る試み—小学六年生の『震災復興まちづくりプラン』—」(大門正克ほか編『生存』の東北史—歴史から問う3・11—』大月書店, 2013年5月, 所収(第7章))
- ・徳水博志「〈特集 道徳の教科化に抗して—学習指導要領体制下の学校・授業づくり〉[実践1] 総合学習『震災体験を記録しよう』」『生活教育』No.781, 2013年12月
- ・徳水博志(元石巻市立雄勝小学校教員)「〈被災地の子どもたちのいま①〉(宮城) 震災後の子どもたちと学校」『教育と文化』No.77, 2014年10月
- ・徳水博志「(第29回(平成25年度)東書教育賞 最優秀賞 小学校部門 受賞論文)『震災体験の対象化』による被災児への〈心のケア〉の試み」(2014年)
- ・徳水博志(雄勝環境教育センター代表)「〈特集 東日本大震災後を生きる〉 雄勝小6年生の震災復興まちづくりプラン」(全国養護教諭サークル協議会編『保健室』No.177, 2015年3月)
- ・徳水博志「〈研究部 ともにつくる生活教育の実践〉 地域復興と学校教育との新たな連携をめざして」『生活教育』No.803, 2015年10月
- ・徳水博志(元小学校教員)「〈地域—日本から世界から238〉 地域と連携し(社会参加の学力)を育てる」『歴史地理教育』No.846, 2016年3月
- ・徳水博志「〈特集 3・11 が問う日本社会の転換〉 地域から『復興教育』へ—石巻市雄勝町の実践—」『経済』No.247(特集 3・11 が問う日本社会の転換), 2016年4月
- ・徳水博志(元石巻市立雄勝小学校教員)「震災後を生きるために美術教育が果たした役割—共同木版画『希望の船』の制作を中心に—」『美術の教室』第100号, 2016年5月
- *関連:『ぼくたちわたしたちが考える復興 夢をのせて—宮城県石巻市立雄勝小学校 震災2年目の実践—』(DVD, 制作:日本児童教育振興財団, 監修・指導:徳水博志, 2012年)

4. 福島県・「被災地」の教師等による論稿

福島県の場合, 特に, 浜通りの津波被災地のみならず沿岸の直接の原発立地地域近辺の原発災害の被害, 放射能汚染・拡散と健康不安, 長期避難と家族離散, 住民の「分断」, いまも広範な「複合災害」の被害と「不安」の渦中にあること, 県内各地が「被災地」ともいえる特異な状況があり, 「被災(者)」という概念の意味合いが複層的で地理的にも広範であること, 等々の点を念頭に置かねばならない。福島記録・報告が記す社会的・政治的な問題群は, 多岐・広範に亘る深刻なものである。

(1) 地域・学校・子ども等の現状報告, 活動・取り組みの記録, 教育実践記録, 等 (2011年度)

- ・佐藤修二(西会津町立西会津中学校)「〈連載〉 言葉の力を育てることは, 生きる力を育てること—中学校での仕事として—(第3回~第10回)」『作文と教育』No.778~No.787, 2011年6月~2012年3月

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

- ・朝倉由美子(県立安達東高校・養護)「(特集 東日本大震災・高校生に学びの保障を—⑥(福島) 保健室に悩みをぶつける生徒—『あきらめずに希望を』と願う—)『高校のひろば』No.80, 2011年6月
- ・慶徳芳夫(県立須賀川桐陽高校・県立高教組副執行委員長)「(特集 東日本大震災 学校・教育は今) [被災地から 福島・高校] 原発事故による不安と恐怖の中で」『クレスコ』No.124, 2011年7月
- ・塚越あつこ(元公立小学校)「(特別企画 東日本大震災 子どもは、学校は) 大震災からの2ヶ月—福島県双葉郡広野町より—」『作文と教育』No.780, 2011年8月
- ・おがわせせらぎ(全生研会員)「(震災特別報告 震災派遣・ボランティアから見た被災現地・1) [災害派遣] 過酷な現状から明日の希望へ—避難所の現場から—」『生活指導』No.693, 2011年8月
- ・「(特集 I 震災のなかで、何を学び、何を变える 1 福島の子どもと学校はいま①) 原発震災禍の学校—福島県相馬地方の教職員への聞き取りから—(記録=細金恒男)」『教育』No.788, 2011年9月
- ・門馬寛(田村市立滝根中学校)「(東日本大震災をおもう 第3回) 原発事故から4カ月が経って」『クレスコ』No.126, 2011年9月
- ・杉内清吉(県立安達高校)「(小特集 東日本大震災からの復興に向けて—①(福島の高校現場から報告) 放射能バスターズまで」『高校のひろば』No.81, 2011年9月
- ・数間靖徳(小学校)「(特集 東日本大震災と教師・子どもたち(1)一現地からの報告—) [福島より-1] 分断された町・学校・家族—原発から30キロ圏内の現状—」『生活指導』No.695, 2011年10月
- ・山口智史(いわき市立湯本第一中学校)「(特集 東日本大震災と教師・子どもたち(1)一現地からの報告—) [福島より-2] 震災後の対応と取り組み—いわき市からの報告—」『生活指導』No.695, 2011年10月
- ・おがわせせらぎ(全生研会員)「(特集 東日本大震災と教師・子どもたち(1)一現地からの報告—) [近隣自治体より] 過酷な現状から明日の希望へ—避難所の現場から②—」『生活指導』No.695, 2011年10月
- ・佐藤実(福島県歴教協)「(特集 福島第一原発事故と授業) 原発事故に翻弄される福島の小学校からの現地報告」『歴史地理教育』No.781, 2011年11月
- ・古関勝則(福島全生研・小学校)「(特集 東日本大震災と教師・子どもたち(2)—教育, 生活指導の課題を問う—) [生活の復興と生活指導の課題 全生研第53回全国大会自主集会「東日本大震災と教師・子ども」報告者から] いかに人間同士が結びつくか」『生活指導』No.696, 2011年11月
- ・菅野偉男(福島絵の会・ふくしま民主教育研究センター)「(特別報告 現地東北からのレポート) 3.11以降福島の地域と教育はどうなっているのか(新しい絵の会編『美術の教室』No.91, 2011年11月)
- ・慶徳芳夫(県立安積黎明高校(*7月までは県立須賀川桐陽高校))「(特集 学校ってなんだろう?—3・11が問いかけているこれからの学校—) [実践2] 地域の学校づくりの意義をあらためて考える—原発震災から半年を経た福島からの報告—」『生活教育』No.757, 2011年12月
- ・大和田秀文(原発の安全性を求める福島県連絡会前代表)「『福島原発』住民運動四〇年」『歴史地理教育』No.783, 2011年12月
- ・中村晋(高校)「(特集1 東日本震災と教育) いのちを大事にした教育をしたい」『高校生活指導』No.191(2012年冬季号), 2011年12月
- ・大貫昭子(県立原町高校, 県立高教組相双支部執行委員)「(小特集 東日本大震災からの復興に向けて(2)) 原発二〇km圏内の高校では—工業高校の就職事情—」『高校のひろば』No.82, 2011年12月
- ・井戸川あけみ(南相馬市小高中学校)「(特集 大震災と教育復興にむけて) 大震災と子どものケア」『教育と文化』No.65, 2011年12月
- ・遠藤智恵(南相馬市立小高中学校・事務職員)「(特集 震災と教育③) 南相馬市の学校・子ども・地域」『教育』No.792, 2012年1月
- ・村松久美子(公立小学校)「(Next Generation たちの手紙リレー⑩) 福島の状況から見つめ直した『教育観』」『クレスコ』No.130, 2012年1月
- ・佐藤慎治(南相馬市立原町第一中学校)「(特集 I 教育実践報告①(第12分科会「地域と教育」)) 福島の子どもたちが抱えるであろう問題点」『教育』No.793, 2012年2月
- ・古関勝則(川俣町立飯坂小学校)「(実践の広場 手をつなぐ—教師・親・地域の人々) 原発事故で避難した方を地域で守る」『生活指導』No.699, 2012年2月
- ・鈴木由智佳(福島県歴教協)「(特集 東日本大震災と子どもたち) 原発事故に翻弄される子どもたち—福島県—」『歴史地理教育』No.786, 2012年3月
- ・山本富士夫(福島県歴教協)「(連載 東日本大震災の被災地から③福島) 避難した児童・生徒に新たな困難」『歴史地理教育』No.786, 2012年3月

- ・福田和久(福島成蹊高校)「東日本大震災・福島原発事故と子どもと学校」(歴教協編『歴史教育・社会科教育年報 2011年版 東日本大震災と民主主義の課題』三省堂, 2012年3月, 所収)
- ・大貫昭子(県立原町高校)「(特集 〈3・11〉から1年 子どもたち・学校は今) [福島] 原発災害後の学校と子どもたちの状況―福島を明けさせるために―」『クレスコ』No.132, 2012年3月
- ・高橋聡(県立川俣高校, 県立高校教組執行委員長)「〈小特集 東日本大震災からの復興に向けて (3) ―②〉 フクシマで体験し, 感じたこと―震災・放射能禍の中で高校生は―」『高校のひろば』No.83, 2012年3月
- ・齋藤美智子(福島市・さくら保育園園長)「〈子どもの育ちと暮らしの現場から〉 [1-3 福島 保育所] 放射能災害から子どもを守る砦―保護者と保育者が手を取り合って―」(「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク編『大震災と子どもの貧困白書』かもがわ出版, 2012年3月, 所収)
- ・江刺多恵子(福島市・さくら子育て支援センター所長)「〈子どもの育ちと暮らしの現場から〉 [1-4 福島 子育て支援センター] 関係づくりで支える母親の居場所―放射線災害下の家庭育児の不安に寄り添って―」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)
- ・松本義一・鈴木久之(福島県学校事務職員制度研究会)「〈子どもの育ちと暮らしの現場から〉 [1-7 福島 就学援助・学校事務] 浮き彫りにされた教育費思想の貧困―避難家庭への支援とお金の心配をさせない学校・就学保障―」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)
- ・草野芳明(福島県立高教組副委員長, 県立長沼高校教諭)「〈子どもが生きるための権利保障〉 [2-8 福島 高等学校] 原発災害下, サテライトで学ぶ高校生は―避難生活の困難のなかで学習権は保障されているか―」(前掲『大震災と子どもの貧困白書』, 2012年3月, 所収)

〈2012年度〉

- ・中村晋(高校)「〈特集 東日本大震災・原発災害1年 悲しもう…〉 福島から問う『教育と命』」『世界』(岩波書店) No.829, 2012年4月
- ・(遠藤慎一・遠藤智恵・加賀八重子・佐藤慎治・白木次男・山本富士夫, ほか)「〈特集 原発災害と教育①〉 [座談会] 3・11から1年 いま子ども・教師・学校・地域は―福島・南相馬からのメッセージ―」『教育』No.797, 2012年6月
- ・矢森健一(県立相馬農業高校飯館校・分校長)「〈特集 原発災害と教育③〉 [実践] ゼロからの出発―より地域に根ざした学校をめざして―」『教育』No.797, 2012年6月
- ・井戸川あけみ(南相馬市立小高中学校・養護)「〈特集 原発災害と教育④〉 [実践] いま保健室でできること―子どもたちのケアと教育―」『教育』No.797, 2012年6月
- ・菊池幸枝(相馬市立向陽中学校・養護)「〈特集 原発災害と教育⑤〉 [実践] 委員会活動をとおして原発事故と向きあう中学生」『教育』No.797, 2012年6月
- ・吉野裕之(子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク世話人)「〈特集 原発災害と教育⑥〉 [実践] 『最善の利益』を考え子どもを守る―保護者のとりくみ―」『教育』No.797, 2012年6月
- ・佐々木清(郡山市立明健中学校)「〈特集 「原発・放射能」問題をどう教えるか [中学校] 『放射線教育元年』中学校理科教育実践の歩みと2年目に向けて』『クレスコ』No.135, 2012年6月
- ・齋藤美智子(福島市・さくら保育園)「〈Logos 教育を考える言葉〉 あれから1年, 福島の保育園から」『生活指導』No.702, 2012年6/7月
- ・福田和久(福島成蹊高校)「〈I 原発に依存しない社会をめざして〉 〈実践・高〉 福島になぜ原発が作られたのか」『歴史地理教育 (7月増刊号 原発震災後の日本―地域・授業・研究―)』No.792, 2012年7月
- ・(大和田秀文(元中学校教師, 原発の安全性を求める福島県連絡会前代表) (聞き手/福田和久(福島県歴教協)) 「〈I 原発に依存しない社会をめざして〉 〈インタビュー〉 原発反対運動四〇年」『歴史地理教育 (7月増刊号)』No.792, 2012年7月
- ・遠藤智恵(南相馬市立小高中学校・事務職員)「〈特集1 〈復興〉の教育学②〉 [報告] 『フクシマ』で生き, 生きていくこと」『教育』No.799, 2012年8月
- ・佐藤修二(西会津町立西会津中学校)「合宿研で学んだこと―子どもの表現を大切にすることと, 問題を多面的にとらえることと―」『作文と教育』No.792, 2012年8月
- ・山本富士夫(県立原町高校)「〈小特集 東日本大震災からの復興に向けて (5) ―①〉 福島サテライト方式の高校生」『高校のひろば』No.85, 2012年9月
- ・山本富士夫(公立高校)「〈学校選択制・学校統廃合は, 今〉 [高校統廃合 福島] 原発事故後の高校『サテライト方式』と地域復興の課題」『クレスコ』No.139, 2012年10月

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

- ・増子啓信（相馬市立桜丘小学校）「〈第3部 原発問題と教育方法〉2 『放射線って、なあに？』—フクシマのこれからを生きる—」（日本教育方法学会編『教育方法41 東日本大震災からの復興と教育方法—防災教育と原発問題—』図書文化、2012年10月、所収）
- ・福田和久（福島成蹊高校）「〈第3部 原発問題と教育方法〉3 原発問題を教える立場から—歴史を踏まえ、原発事故と向き合う実践とは—」（前掲『教育方法41』、2012年10月、所収）
- ・加藤清和（元高校教師）「〈連載 東日本大震災の被災地から①福島〉沈黙の街富岡町—一時帰宅に同行して—」『歴史地理教育』No.796、2012年11月
- ・藤田美智子（福島市立平野中学校）「〈特集 東日本大震災、福島原発事故後の生活を綴る〉《実践の記録》子どもたちは、福島に生きる—原発事故後の生活を綴る—」『作文と教育』No.795（2012年版日本子ども文藝集）、2012年11月
- ・鈴木直（中学校）「〈授業 学びと生活指導 原発と福島—中学生は原発をどう捉えたのか？—」『生活指導』No.705、2012年12月/2013年1月
- ・佐藤誠（白河市立白河第四小学校）「あれから一年半、原発事故後のフクシマの今—県南の一教師の目から見た現状—」（歴教協編『歴史教育・社会科教育年報 2012年版』三省堂、2012年12月、所収）
- ・小林みゆき（県立高校、県立高教組執行委員）「〈東日本大震災をおもう 第18回〉原発事故の衝撃—福島の高校生はいかに受けとめたか—」『クレスコ』No.142、2013年1月
- ・慶徳芳夫（県立安積黎明高校）「〈特集1 せめぎあう政治と教育②〔実践〕 政治は『福島』を守ったか？—新たな政治教育の課題—」『教育』No.805、2013年2月
- ・穴戸仙助（伊達市立富野小学校校長）「〈特集 あの日からの「福島」と教育②〉〔報告〕子どもを被爆から守ること、そして移動教室の意義」『教育』No.806、2013年3月
- ・井戸川あけみ（南相馬市立小高中学校・養護）「〈特集 あの日からの「福島」と教育③〉〔保健室から〕心と体のケアとともに成長を促すとりくみを—震災後の子どもたちと学校—」『教育』No.806、2013年3月
- ・小林みゆき（県立福島工業高校）「〈特集 あの日からの「福島」と教育④〉〔実践〕高校生たちの作品—思い—震災体験を問いつける—」『教育』No.806、2013年3月
- ・菅野正寿（NPO法人福島県有機農業ネットワーク代表）「〈特集 あの日からの「福島」と教育⑤〉〔論考〕子どもたちの歓声が野良にこだまする日まで—農の力で希望の種を蒔く—」『教育』No.806、2013年3月
- ・石田論（南相馬市立真野小学校）「〈いま学校で〉先の見えない不安は「いまも」」『教育』No.806、2013年3月
- ・福田和久（福島成蹊高校）「〈Ⅲ現地からの報告〉被災二年目を迎える福島」『歴史地理教育（3月増刊号 原発の授業と資料—福島をどう教えているか—）』No.802、2013年3月
- ・二階堂晃子（福島作文の会）「〈特集 「日本の平和と安全を考える」 今、どんな表現活動が必要か〉（福島発）伝えることの大切さ」『作文と教育』No.799、2013年3月
- ・慶徳芳夫（安積黎明高校・福島県立高教組教文部長）「〈小特集 東日本大震災からの復興に向けて(7)〉 No more Fukushima を発信するために—生徒の声と現実—に寄り添って—」『高校のひろば』No.87、2013年3月

〈2013年度〉

- ・橘内悦子（大熊町立熊野小学校）「〈特集 あれから2年 3・11後の今〉〔実践1〕避難先で学ぶ大熊の子どもたち」『生活教育』No.775、2013年6月
- ・遠藤慎一（相馬市立中村第一中学校）「〈シリーズ震災と教育 第4回〉被災地・被災地から見る『学力』問題と今後への教育実践の課題」『人間と教育』No.78、2013年6月
- ・慶徳芳夫（県立高校）「〈連載〉子どもたちの生きる世界と向き合う 3.11後、福島の高校生の願い ①～④」『クレスコ』No.147～150、2013年6月～2013年9月
- ・中村晋・大森直樹『福島から問う教育と命』岩波書店（岩波ブックレット）、2013年8月
- ・菅野偉男（ふくしま民主教育センター運営委員長）「〈特集 3.11 東日本大震災と教育〉〔フォーラム記録資料Ⅲ〕福島の地域と教育、その問題と課題」『民主教育研究所年報2012』第13号、2013年11月
- ・鈴木茂男（福島県歴教協）「原発事故から三年目の福島の現状」（歴教協編『歴史教育・社会科教育年報 2013年版』三省堂、2013年12月、所収）
- ・小林みゆき（県立福島工業高校・県立高教組執行委員）「〈シリーズ震災と教育 第5回〉文集『福島から伝えたいこと』に希望を見出して」『人間と教育』No.80、2013年12月

土屋直人

- ・遠藤智恵（公立中学校事務職員）「〈第1章 学校とは、学力とは一被災地で問われたこと〉 問われる学力と生存の権利—南相馬・小高区の学校から—」（教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第5巻 3・11と教育改革』かもがわ出版、2013年12月、所収）
- ・鈴木直（公立中学校教諭）「〈中学校・実践報告1〉 原発と福島—福島の中学生は原発をどうとらえたか—」（子安潤・塩崎義明編著『原発を授業する—リスク社会における教育実践—』旬報社、2013年12月、所収）
- ・伊藤弥（須賀川市立白江小学校）「〈授業と生活指導〉 福島からの震災・原発の授業—福島に住む子ども達と何を教材化し、考えていくか—」『生活指導』No.712, 2014年2/3月
- ・齋藤美智子（福島市さくら保育園）「〈特集1 3・11 3年目を生きる⑦〉 [福島] 『測って食べる』『測って遊ぶ』なかでの保育』『教育』No.818, 2014年3月
- ・石井賢一（浪江町立浪江小学校校長）「〈特集1 3・11 3年目を生きる⑧〉 [福島] なみえで学び なみえで教え なみえを考える—『ふるさとなみえ科』の実践で子どもを育む—」『教育』No.818, 2014年3月
- ・吉野裕之（NPO 法人シャローム災害支援センター）「〈地域—日本から世界から221〉 放射線から子どもたちを守りたい—福島市の現状と課題—」『歴史地理教育』No.816, 2014年3月
- ・勝治美喜子（南相馬市立原町第三小学校学習支援員）「〈Ⅲ福島の現状と各地の反原発の取り組み〉 [福島] 南相馬で生きるということ」『歴史地理教育（3月増刊号 3・1と3・11—ビキニと福島—）』No.817, 2014年3月
- ・福田和久（福島成蹊高校）「〈IVビキニ, 福島, 原発を子どもと共に学ぶ〉 [高校] 原発事故を風化させないために」『歴史地理教育（3月増刊号）』No.817, 2014年3月
- ・遠藤慎一（公立中学校・福島県民教連事務局長）「〈特集 〈3・11〉 から3年—被災地の現在から考える〉 [福島からの報告] 原発事故から3年, 子どもたち・学校は今—フクシマからの告発—」『クレスコ』No.156, 2014年3月
- ・山本富士夫（県立高校）「〈特集 〈3・11〉 から3年—被災地の現在から考える〉 [福島からの報告] サテライト方式高校はいまどうなっているか」『クレスコ』No.156, 2014年3月

〈2014年度〉

- ・佐藤修二（西会津町立西会津中学校）「〈窓—子ども・教育（第18回）〉 『困難』を希望へ—改めて子どもたちとともに学ぶということ—」『作文と教育』No.812, 2014年4月
- ・佐藤秀樹（福島市・渡利学童保育きりん教室指導員）「〈特集 子どもたちのからだと心・ことばからどんな生活が見えるか〉 原発事故で子どもたちが失ったもの, 取り戻したもの—福島市・渡利の子どもたちの場合—」『作文と教育』No.814, 2014年6月
- ・佐藤秀樹（渡利学童保育きりん教室指導員）「〈特集1 子どもと教師の放課後・夏休み〉 取り戻したものと失ったままのもの」『教育』No.822, 2014年7月
- ・杉内清吉（県立安達高校）「〈V 日本国憲法と沖縄・福島〉 [授業実践/高校] 憲法から原発災害を考える」『歴史地理教育（7月増刊号）』No. 2014年7月
- ・佐原成典（元二本松市小学校教員）「〈特集 平和・いのちの学習を今こそ—憲法・原発・震災・沖縄—〉 原子力発電のリスクを子どもたちに伝えよう」『作文と教育』No.816, 2014年8月
- ・古関勝則（小学校）「〈特集 道徳の教科化にどう立ち向かうか〉 [小学校実践] みんなで支え, 励まし合う社会に」『生活指導』No.715, 2014年8/9月
- ・藤田美智子（元福島市立公立中学校）「〈私の忘れ得ぬ子ども・作品 第20回 福島〉 福島に生きる教師として, 子ども心に寄り添いながら」『作文と教育』No.817, 2014年9月
- ・鈴木恵一（大熊町教育委員会指導主事）「〈特集 忘れていませんか, 3・11〉 [実践1] 放射線教育を通した『ふるさと創造学』」『生活教育』No.794, 2015年1月
- ・佐藤秀樹（渡利学童保育きりん教室指導員）「〈特集 忘れていませんか, 3・11〉 [実践3] 『原発事故』で失ったものを取り戻せるのか」『生活教育』No.794, 2015年1月
- ・村松久美子（小学校）「福島で生きて」『歴史地理教育（3月増刊号 3・11と「東北」の未来）』No.832, 2015年3月
- ・福田和久（福島成蹊高校）「〈Ⅲ子どもたちが学ぶ震災後の「東北」〉 震災・原発事故災害の経験をどのように伝えるか」『歴史地理教育（3月増刊号）』No.832, 2015年3月
- ・井田玲子（公立中学校）「〈特集 〈3・11〉 から4年 学び, 発信し, 行動する〉 (福島からの報告) 目の前の子どもたちに寄り添いながら—東日本大震災, 東電・福島第一原発事故から4年が過ぎて—」『クレスコ』No.168, 2015年3月

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

- ・大貫昭子(県立高校)「〈特集 〈3・11〉から4年 学び、発信し、行動する〉(福島からの報告) 子どもたちの実態から出発する当たり前の施策こそ必要—福島・被災地の高校現場から—」『クレスコ』No.168, 2015年3月
- ・大貫昭子(県立原町高校)「〈特集2 生徒たちの中の3・11〉[実践記録③] 福島から伝えたいこと」『高校生活指導』No.199, 2015年3月

〈2015年度〉

- ・鈴木直(中学校)「〈東日本大震災から4年—子ども・学校・地域のいま— 特別報告3) 福島の子どもたちは、いま—福島からの報告—」『生活指導』No.719, 2015年4/5月
- ・福田和久「震災・原発事故災害を現代史学習の一項目に」(歴史学研究会編『歴史学研究(増刊号)』No.937, 2015年10月)
- ・藤田美智子(元公立中学校)「仲間と出会い、自分に向き合う」『作文と教育』No.833, 2016年1月
- ・角田政志(福島県教職員組合中央執行委員長)「〈特集 東日本大震災と原発事故から5年 被災地の学校現場から 3福島〉 『福島の風化』が進むなかで」『教育と文化』No.82, 2016年2月
- ・小野田敏之(大熊町立大熊中学校長)「〈特集1 原発災害・避難から5年 福島の子ども・学校・地域〉 未来を託す子どもたちに」『教育』No.842, 2016年3月
- ・中村秀夫(ジャーナリスト)「〈特集1 原発災害・避難から5年 福島の子ども・学校・地域〉 避難のなかで地域とともにある学び」『教育』No.842, 2016年3月
- ・高橋美加子(南相馬市・榊北洋舎クリーニング代表取締役)「〈特集1 原発災害・避難から5年 福島の子ども・学校・地域〉 原発被災地域で希望をどのように生み出していくのか—南相馬からの便り—」『教育』No.842, 2016年3月
- ・石井賢一(富岡町教育委員会教育長)「〈特集 3・11から5年の福島〉 『ふるさとなみえ科』と『ふるさと創造学』の取り組み」『歴史地理教育』No.846, 2016年3月
- ・村松久美子(南会津郡下郷町立榑原小学校)「〈小学校の授業 特別活動〉 福島でフクシマを扱う難しさ—私が実践できたこと—」『歴史地理教育』No.846, 2016年3月
- ・杉内清吉(県立安達高校)「〈シリーズ震災と教育 第13回〉 福島における原発事故後の教育課題」『人間と教育』No.89, 2016年3月
- ・鈴木茂男(県教組いわき支部長, 公立中学校)「〈特集 いのちを尊ぶ学び—東日本大震災から5年—〉 [福島からの報告] この子どもたちとともに」『クレスコ』No.180, 2016年3月
- ・菅野貴子(福祉保育労福島支部執行委員長)「〈特集 いのちを尊ぶ学び—東日本大震災から5年—〉 [被災地の子どもの実態] あの日から今—福島の現状と子どもの育ち—」『クレスコ』No.180, 2016年3月

〈2016年度〉

- ・鈴木直(中学校)「〈特集2 東日本大震災から5年—福島からの発信—〉 帰還者支援の現場から見えてくること—『ままカフェ』の取り組みから—」『生活指導』No.725, 2016年4/5月
- ・佐藤慎治(中学校)「〈特集2 東日本大震災から5年—福島からの発信—〉 南相馬市の子どもたちの抱える問題」『生活指導』No.725, 2016年4/5月
- ・古関勝則(小学校)「〈特集2 東日本大震災から5年—福島からの発信—〉 米沢市の避難者支援制度について—人に優しい行政のあり方—」『生活指導』No.725, 2016年4/5月
- ・佐藤方信(大沼郡三島町立三島小学校)「放射線と、放射線教育を通して生きることに向き合う—二〇一三年一年生活科の実践より—」『生活教育』No.812, 2016年7月
- ・鈴木直(福島市立岳陽中学校)「実践記録 福島の現実から授業をどのように組み立てるべきか?」(竹内常一・子安潤・坂田和子編著『シリーズ教師のしごと4 学びに取り組む教師』高文研, 2016年8月, 所収)
- ・齋藤毅(県立福島北高校)「映画『種まきうさぎ』の青年たち—ピキニ・福島の核被災に学び、地域と世代・国境を越えた高校生・若者の自主活動—」『作文と教育』No.843, 2016年11月
- ・遠藤慎一(南相馬市)「(隔月連載) 3.11 東北便り 福島だより 双葉・相馬の今(第5回〜)」『生活教育』No.817, 2016年12月〜

特に、東電福島第一原発事故、原発災害等、原発についての学習指導を、例えば福田和久氏

や鈴木直氏らが継続的に展開し、教育実践を切り拓こうとしていることが注目される。

なお、福島県立高教組、福島県教組、福島作文の会は、以下の記録集等を作成している。

- ・福島県立高等学校教職員組合女性部編『福島から伝えたいこと—あの日 あの時から 教師と生徒の声—』（第1集）2012年4月
- ・福島県教職員組合放射線教育対策委員会・科学技術問題研究会編著『子どもたちのいのちと未来のために学ぼう—放射能の危険と人権—』明石書店、2012年7月
- ・福島県立高等学校教職員組合女性部編『福島から伝えたいこと 第2集—奪われた尊厳を取り戻すために—』2013年4月
- ・福島県作文の会「地下水」編集委員会編『福島子ども文詩集 地下水 第7号—原発被災地の子どもたちの記録—』福島県作文の会、2013年7月
- ・福島県教職員組合編『震災・原発事故記録集 3.11 福島の教職員—東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故下で—』2015年3月

(2) 白木次男氏（南相馬市・小学校）の教育実践記録

白木次男氏は、3.11 震災時には南相馬市立原町第一小学校、2013 年度からは同市立石神第一小学校の教諭。日本作文の会常任委員で、遙か震災より前から福島浜通り地域の教師として実践を重ねてきた「生活綴方教師」である。震災後、苦難の中にある子どもの生活台に立ち、子どもたちが「ありのままに」暮らしの事実や内面を書き綴ることを励ましながら、学級文集を読み合う取り組み、また地域の現実を学ぶ総合学習や、構成劇発表会等の実践も組織するなど、「表現」を重んじ、「希望を紡ぐ」ことを念願し実践を重ねてきた⁴⁰。その2014年度の教育実践の一部の場面は、NHK 地方発ドキュメンタリー「ずっと言えなかった～福島 親子の手紙～」(2015年3月24日(23日深夜))で放映された。2016年3月で定年退職。

- ・白木次男（南相馬市立原町第一小学校）「〈特別企画 東日本大震災 子どもは、学校は〉 それでも私たちは教師だ」日本作文の会編『作文と教育』No.780, 2011年8月
- ・白木次男「〈特集 子どもたちと 東日本大震災、福島原発事故〉(実践の記録) 子どもたちを伴走する」『作文と教育』No.783 (2011年 日本子ども文詩集), 2011年11月
- ・白木次男「〈東日本大震災をおもう 第6回〉 『早く帰っちょ』」『クレスコ』No.129, 2011年12月
- ・白木次男「〈東日本大震災をおもう 第7回〉 真実を教えないのは罪」『クレスコ』No.130, 2012年1月
- ・白木次男「〈特集 地震・災害に遭遇した子どもたち〉 子どもたちに安心して食する喜びを」『食べもの文化』No.440, 2012年1月
- ・白木次男「〈東日本大震災をおもう 第8回〉 『あの日からのおくりもの』」『クレスコ』No.131, 2012年2月
- ・白木次男「子どもたちと『希望』を紡ぐ」(地域民主教育全国交流研究会・坂元忠芳編『(シリーズ現代と教育) 東日本大震災と子ども・教育—震災は私たちに何を教えるか—』桐書房 2012年3月, 所収, 第1章第2節)
- ・白木次男「〈特集 「原発・放射能」問題をどう教えるか」[小学校] 福島原発事故の真実を教える意味」『クレスコ』No.135, 2012年6月
- ・白木次男『それでも私たちは教師だ—子どもたちと共に希望を紡ぐ—』本の泉社, 2012年7月(単著)
- ・白木次男「〈特集 東日本大震災・東電原発事故後の教育 子ども表現を大切に〉 私たちは、どこに拠って立つのか、そして、『読み合う』ことの意味」『作文と教育』No.792, 2012年8月
- ・白木次男（南相馬市立原町第一小学校教員）「〈特集 (3.11) から2年 子どもたちの願いから考える学校・教育のあり方」[被災地から 福島] 子どもたちの声を聴きながら『未来』を選び取っていく—原発被災地の子どもとともにつくる教育—」『クレスコ』No.144, 2013年3月
- ・白木次男（公立小学校）「〈第1章 学校とは、学力とは—被災地で問われたこと—」『あの日からのおくりもの』—南相馬・子どもの声を聴きともに生きる—(教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第5巻 3・11と教育改革』かもがわ出版, 2013年12月, 所収)
- ・白木次男（南相馬市立石神第一小学校）「〈シリーズ震災と教育 第6回〉 福島の今と復興、復興後の教育を考える」『人間と教育』No.82, 2014年6月

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

- ・白木次男(南相馬市立石神第一小学校)「〈特集 3.11 子どものころによりそって〉 子どもたちと共に『希望』を紡ぐ—四年目の春に—」日本子どもの本研究会編『子どもの本棚』2015年3月号
- ・白木次男「(長編実践その1) 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ—あの日からの問いかけ—」『作文と教育』No.828, 2015年8月
- ・白木次男「(長編実践その2) 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ 『かくされた悪を注意深くこぼむ』—賢明に生きる子どもにしたい—」『作文と教育』No.829, 2015年9月
- ・白木次男「(長編実践その3) 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ—構成劇『Dreams come true together この星に生まれて』—」『作文と教育』No.830, 2015年10月
- ・白木次男「(長編実践その4) 子どもたちの声に聴き、共に希望を紡ぐ 『ずっと言えなかった』—福島、親子の手紙 NHK TV から—」『作文と教育』No.832, 2015年12月
- ・白木次男「生きづらい社会にあって 子ども・父母・地域と繋がる」『作文と教育』No.836, 2016年4月
- ・白木次男(元南相馬市立小学校教諭)「(隔月連載) 3.11 東北便り 福島だより 双葉・相馬の今 (第3回～第4回)」『生活教育』No.813・2016年8月, No.815・2016年10月

5. 関連の論稿, 書誌等

(1) 青森県における地域等の現状報告, 活動や取り組み, 教育実践記録, 課題提起, 等

関連して、東北沿岸3県のほか、青森県における教育実践(論)及び研究等の動向についても若干最後に触れておきたい。特に、3・11前後の、民主教育研究所『環境と地域』教育研究委員会と青森県国民教育研究所による青森調査の動向(下北地域・原発立地と地域開発の歴史、その実施調査)は、一つの大きな「地域教育実践」の展開として捉えられる。

- ・田村儀則(県立八戸水産高校)「〈特集 東日本大震災・高校生に学びの保障を—③(青森) 大震災に何を学び、何ができるのか—できるだけ早い復興と発展を願って—」『高校のひろば』No.80, 2011年6月
- ・谷崎嘉治(県立青森工業高校定時制)「〈特集1 東日本震災と教育〉 洗平が成長する転機」『高校生活指導』No.191 (2012年冬号), 2011年12月
- ・田村儀則(県立八戸水産高校)「〈子どもの育ちと暮らしの現場から〉 [1-10 青森 水産高等学校] 海を愛する生徒を育てたい—生徒・保護者の願いに応え、地域に根ざした水産教育を—」(「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク編『大震災と子どもの貧困白書』かもがわ出版, 2012年3月, 所収)
- ・吉田守夫(向陵高校)「〈連載 東日本大震災の被災地から⑥青森〉 八戸港の復旧」『歴史地理教育』No.790, 2012年6月
- ・寺田肇(青森県国民教育研究所)「〈連載 いま地域で—第20回〉 カタツミの歩みの方向を確かにながら」『人間と教育』No.74, 2012年6月
- ・小山内孝(核燃料サイクル施設立地反対連絡会議事務局長)「〈地域—日本から世界から201 202〉 六ヶ所村の今, 核燃料サイクル施設の今 (上)・(下)」『歴史地理教育』No.790~No.791, 2012年6月~2012年7月
- ・橋本誠一(青森県作文の会)「〈日本作文の会60周年企画〉 北の紋章(1)・(2)」『作文と教育』No.789・No.791, 2012年5月・2012年7月
- ・谷崎嘉治(県立高校, 青森高教組執行委員長)「〈特集 子どもたちの願い・叫びにどう応えるか〉 [教育実践・高校] 子どもの成長はジグザグ—人との出会いの中で成長する思春期—」『クレスコ』No.137, 2012年8月
- ・斉藤作治(青森県国民教育研究所員)「〈特集 「環境と地域」教育研究の理論と実践〉 下北半島からの報告: 原発と浮島丸事件—開発・原発・平和問題にたいする教師の役割—」『民主教育研究所年報2011』第12号, 2012年8月
- ・寺田肇(青森県国民教育研究所所長)「〈地域教育研究所より シリーズ⑥〉 青森県国民教育研究所 近年の取り組み 今地域で!」『人間と教育』No.83, 2014年9月
- ・吉田守夫(向陵高校)「〈実践報告 高校〉 『どちらともいえない』から始めて—核燃・原発マネーの授業—」『歴史地理教育 (11月増刊号)』No.827, 2014年11月
- ・寺田肇(青森県歴教協)「〈II 「震災後」を生きる—震災・津波・原発と地域—〉 原子力半島下北の未来を見つめる」『歴史地理教育 (3月増刊号 3・11と「東北」の未来)』No.832, 2015年3月

- ・田村儀則(県立八戸水産高校)「〈シリーズ震災と教育 第12回〉震災その後—ルポ『2015 八戸の水産業と教育』—」『人間と教育』No.88, 2015年12月

(2) 震災と教育, 震災後の教育実践等に関する諸資料, 先行諸研究と研究動向

最後に, 上掲諸文献との重複もあるが, 〈震災後の(被災地での)教育実践〉等に関連する文献(著書, 報告書等のみ)の一部を挙げたい。その多くは, 上記の諸報告からの知見, 諸実践の特質・意義を考察している教育学研究論文を含む, 貴重な先行研究である。

- ・大森直樹『大震災でわかった学校の大問題—被災地の教室からの提言—』小学館(小学館101新書), 2011年8月
- ・みやぎ教育文化研究センター・日本臨床教育学会震災調査準備チーム編『3・11 あの日のこと, あの日からのこと—震災体験から宮城の子ども・学校を語る—』かもがわ出版, 2011年9月(*田中孝彦「教師の語りを聴いて 地域と学校の『復興』の哲学を探る」ほか諸論稿)
- ・「現代」の授業を考える会編『エネルギーと放射線の授業』太郎次郎社エディタス, 2011年11月
- ・数見隆生編著『子どもの命は守られたのか—東日本大震災と学校防災の教訓—』かもがわ出版, 2011年12月
- ・田中孝彦『子ども理解と自己理解』かもがわ出版, 2012年1月
- ・地域民主教育全国交流研究会・坂元忠芳編『シリーズ現代と教育 東日本大震災と子ども・教育—震災は私たちに何を教えるか—』桐書房, 2012年3月(*坂元忠芳「被災地の子どもの作文集『つなみ』について」ほか諸論稿)
- ・「なくそう!子どもの貧困」全国ネットワーク編『大震災と子どもの貧困白書』かもがわ出版, 2012年3月(*田中孝彦「大震災と学校の再生—子どもの生存を支え, 学習要求に応える—」ほか諸論稿)
- ・鈴木庸裕編著『「ふくしま」の子どもたちとともに歩むスクールソーシャルワーカー—学校・家庭・地域をつなぐ—』ミネルヴァ書房, 2012年5月
- ・『民主教育研究所年報2011(特集「環境と地域」教育研究:その理論と実践)』第12号, 2012年8月(*藤岡貞彦「チェルノブイリからフクシマへ」, 野々垣務「下北半島を歩く 調査開始」ほか諸論稿)
- ・田端健人『学校を災害が襲うとき—教師たちの3・11—』春秋社, 2012年10月
- ・『東日本大震災 宮城・岩手・福島の学校—その被災と対応の報告—』(第9回日本教育保健学会仙台大会 2012・3・24 別冊報告集 講演・シンポジウム・テーブルセッションの記録, 編集・東北福祉大学 数見隆生), 2013年1月
- ・大森直樹・渡辺雅之・荒井正剛・倉持伸江・河合正雄編『資料集 東日本大震災と教育界—法規・提言・記録・声—』明石書店, 2013年3月
- ・教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第1巻 子どもの生活世界と子ども理解』かもがわ出版, 2013年4月(*田中孝彦「生活を綴ることと自己を形づくること—子ども理解の深化と教育学の再生のために—」ほか諸論稿)
- ・子安潤『リスク社会の授業づくり』白澤社, 2013年5月
- ・鈴木庸裕編著『震災復興が問いかける子どもたちのしあわせ—地域の再生と学校ソーシャルワーカー—』ミネルヴァ書房, 2013年7月
- ・国民教育文化総合研究所・東日本大震災と学校 資料収集プロジェクトチーム編『資料集 東日本大震災・原発災害と学校—岩手・宮城・福島の教育行政と教職員組合の記録—』明石書店, 2013年9月
- ・清水睦美・掘健志・松田洋介『「復興」と学校—被災地のエスノグラフィ—』岩波書店, 2013年10月
- ・『民主教育研究所年報2012(特集 3.11 東日本大震災と教育)』第13号, 2013年11月(*安藤聡彦「3.11と教育—『環境と地域』研究委員会の取り組み—」ほか諸論稿)
- ・教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第4巻 地域・労働・貧困と教育』かもがわ出版, 2013年12月(*安藤聡彦「〈自己変革〉としての環境教育—『水俣』から『福島』へ, そして次の世代へ—」ほか諸論稿)
- ・同上『講座 教育実践と教育学の再生 第5巻 3・11と教育改革』かもがわ出版, 2013年12月(*佐藤広美「復興の教育思想を考える—沿岸被災地と福島原発事故より—」ほか諸論稿)
- ・子安潤・塩崎義明編『原発を授業する—リスク社会における教育実践—』旬報社, 2013年12月

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

- ・『平成24～26年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 東日本大震災と教育に関する総合的研究研究成果報告書 東日本大震災と教育に関する研究(研究代表・藤田英典)(全体編その1:日本教育学会モノグラフ・シリーズNo.5) 一子ども、園・学校は津波被災と原発災害にどう向きあったか、向きあっているか』2014年3月(*田中孝彦「Ⅱ、子どもたちと教職員の『語り』から、被災地の現在(いま)を考える」ほか諸論稿)
- ・教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第3巻 学力と学校と問い直す』かもがわ出版,2014年4月(*梅原利夫「東日本大震災と向き合う教育課程づくり」ほか諸論稿)
- ・横湯園子『シリーズここで生きる 魂への旅路—戦災から震災へ—』岩波書店,2014年5月
- ・『民主教育研究所年報2013(第Ⅲ部 3.11と向き合う教育課程)』第14号,2014年7月(*梅原利夫「教育課程づくりで地域復興の希望を」ほか諸論稿)
- ・藤田和也『養護教諭が語る東日本大震災—何を体験し、何を為し、何を果たしたのか』日本教育学会特別課題研究「大震災と教育」「学校・教師」グループ・養護教諭小班,農文協,2015年2月
- ・『平成24～26年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 東日本大震災と教育に関する総合的研究研究成果報告書 東日本大震災と教育に関する研究(研究代表・藤田英典)(全体編その2:日本教育学会モノグラフ・シリーズNo.10) —「3.11」以降の子ども・教師・学校の経験と実践・支援・政策・研究の課題—』2015年3月(*上田孝俊「地域の変容と教育実践の模索—石巻市雄勝町の小学校実践から—」,田中孝彦「現地訪問・聴きとり調査から浮かび上がってきた研究課題」,片岡洋子「子どもたちが 3.11と向きあって生きることを支える実践の展開」ほか諸論稿)
- ・日本臨床教育学会編『臨床教育学研究 〈特集 東日本大震災と臨床教育学の課題—当事者の「声」に耳を傾けて—〉』第4号,2016年3月(*田中孝彦「東日本大震災と復興の思想—5年間の現地訪問・聴きとり調査から—」ほか諸論稿)

6. おわりに—今後の検討課題—

上に書き留めてきた文献一覧・目録からは、その時々、一人ひとりの教師等の営みの事実、教師が向き合う地域・学校・子どもの現実、固有の被災状況、震災前後の事情を抱えた各地域での教育実践の展開、実際に文字通り百者百様の相違性、個別性が看取される。

そして、各県ごとに論稿群を一覧として記述し概観すると、3県(青森を加えれば4県)では報告論稿の性質・内容がおおよそ異なり、各県・各地域に固有の、折々の現状と課題性、実践の動向の多様性が顕著に浮かび上がって見える。特に、原発事故とその後の事態を抱える福島の場合、教育活動そのものが困難を抱える状況、地域で続く惨状を記す論稿が数多く、その論稿群の主題の傾向からも「放射能禍」「複合災害」の実態等が明瞭に知れる。津波・原発被災は現在進行形でいまでも続いており、「震災後」は未だ終わっていない¹⁰⁾。

書かれたものは後に残る。後に残された者は、これらの遺された記録から汲み取るべきものを繰り返し問い直すことを通して、「学びなおし」を開始し重ねてゆくことができよう。

次には、各章の中、及びその後半で個別に取り上げた各実践者の教育実践の内実(3・11以前も含め)、その展開の仔細な検討に立ち入ることが、今後に残された大きな課題である。そして今後も「3・11大震災後10年」を見据え、継続的に教師の実践記録等を収集する等、更に精緻な探索・検討の作業を重ね、北方性教育運動の伝統の流れを汲む、〈3・11後の東北における教育実践〉の実像と特質を探るための基礎をより確かなものにした¹¹⁾。

あわせて以後、全国的に着目されていない、東北の教師の実践の営みに継続的に焦点を当て、現地での聞き取り等を重ねて試みたい。ここでは、地域における教育実践研究サークル¹²⁾、東北民教研や、各県教組の教育研究集会での報告書・報告記録の内容等の実際とその動向についてフォローし記述することができなかつた¹⁰⁾。夫々の持ち場で各々のしかたで、地道に(広義の)

地域教育実践を重ねている現場教師は、地域の中に現実に多く存在する。その姿は全国雑誌のみからでは見えてはこない。その内実にも何らかのかたちで迫りたい¹⁹。

*本稿はJSPS 科研費 JP26381005 の助成を受けたものである。

(1) 拙稿「地域に生きる『生活者』としての子どもと学力—北方性教育運動の視点から—」(教育科学研究会編『教育』No.810, 2013年7月), 拙稿「震災後, 政治教育を問い直すために—岩手三陸沿岸の被災とその後から考える—」(全国民主主義教育研究会編『民主主義教育21』No.8, 2014年5月), 拙稿「〈シリーズ震災と教育 第15回〉岩手沿岸地域の子どもの学校の実実—ある教師の模索から考える—」(民主教育研究所編『季刊 人間と教育』No.92, 2016年12月), 等を参照されたい。

(2) なお, ここでいう「地域教育実践」については, さしあたり, 以下の広義, 狭義の, 双方の意味を兼ね, 双方の性質を含むものとして, この言葉・用語を使用する。①狭義の地域教育実践: 学校・教室での, 各教科や総合的な学習の時間等での, 地域を学ぶ学習指導(授業)・学習活動。その地域に生きる子どもの現実生活から出発し, 自らの生活を綴り, 読みあう学級活動, 学級通信・学級文集実践, 子どもの自己表現を保障する作文教育等の実践活動。そして, 子どもの生活現実や, 地域の実態・子どもの生活背景や内面の心情の理解に基づいた, その学級づくりや生活指導, 社会参加の学習や, 学習発表等学校行事等, 地域に根ざした学校教育活動(構想, 実際)など。②広義の地域教育実践: 震災直後の教師・教育関係者としての広範な諸活動, あるいは被災地域及びその周辺に生きる人間としての行動や働きかけ, 地域での取り組み, 地域に生きる多様な人間相互のつながりや協働, 相互的な協力行為など。したがって②の意味では, 主に震災直後に, 現地の地域実態や子ども・親や教師の置かれている現状や, 生存と発達を確保し求めようとする社会的な行動の実際と取り組み, 社会構造や政治的課題をレポートあるいは調査・分析考察する報告, あるいは迷いや葛藤などの思いを披瀝しながら震災後の教育実践の方向や課題に論及し, 教育を「問い直す」思考・見解を示し問題提起する, 様々な主体による報告(という行為のもの)も, 地域を場とした(自己)教育的, 大人も含めた相互連関的な, 地域の社会運動, 広義の地域教育運動として, 広く「地域教育実践」に含まれるものとし, ここでは対象に含める。

(3) その意味で本稿は, 3・11震災後の教育実践等の動向の一端をレビューする意図で以前に書いた, 拙稿「歴史教育・社会科教育の動向 第一章 津波・原発被災と教育実践の方向」(歴史教育者協議会編『歴史教育・社会科教育年報 2013年版』三省堂, 2013年12月, 所収, 166-171頁)の続編にあたるものでもある。

(4) こうした対象雑誌の絞り方(その特有の狭さ)は, 一つは, 筆者が現在, 社会科教育学の立場にあるが故のものでもある。なお, 教育関係雑誌については, 上記のほか, 民間教育研究運動に関連したものとして, 例えば, 全国高校生活指導研究協議会編『高校生活指導』, 教育文化総合研究所編『教育と文化』, 日高教・高校教育研究委員会編『季刊 高校のひろば』(*2013年に終刊), 等々の教育関係雑誌の, 一部を参照し, 関連のものを記載した。

(5) 加えて, ここで, 発達援助職等の当事者の声を聴くこと, 現場教師たちの「語り」に着目する意図については, 例えば田中孝彦らの, 臨床教育学の立場に立つ諸研究の視点から学ぶことが多くある。本稿が, 臨床教育学の一研究に向けて, 事実を記述する一基礎作業の一環, その第一歩の一つにもなり得ていれども思う。

(6) この佐々木氏の活動, またその立場や役割等に言及している論考には, 例えば以下のものがある。片岡洋子「(特集 東日本大震災・東電原発事故後の教育 子どもの表現を大切に) 子どもたちは誰に表現しようのか—メディアが伝えた子どもたちの震災体験をとおして考える—」(『作文と教育』No.792, 2012年8月), 佐藤広美「(第2章 3・11を経た地域と学校再生の展望) 復興の教育思想を考える—沿岸被災地と福島原発事故より—」(教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第5巻 3・11と教育改革』かもがわ出版, 2013年12月, 所収)。

(7) 阿部氏の論稿, 教育実践等に言及し, 分析・考察している研究論文等には, 片岡洋子「(特集1 3・11 3年目を生きる⑨) [論文] 震災後3年を生きる子どもと教育実践の模索」(『教育』No.818, 2014年3月), 等がある。

(8) 制野氏の論稿, 教育実践等について言及し, 分析・考察している研究論文等には, 例えば以下のものがある。小淵朝男「当事者性の相互承認から始まる『生きる世界』の生成」(『生活指導』No.710, 2013年10/11月), 久保

3・11 東日本大震災後の東北3県沿岸被災地等における地域教育実践の展開について

健「(実践の背景) 『生活と文化をどう結ぶか』一制野俊弘の『みかぐら』実践(中学校)から考える」学校体育研究同志会編『たのしい体育・スポーツ』No.278, 2014年1・2月合併号, 田中孝彦「(特集 3・11)から3年―被災地の現在から考える」子どもたちと教職員の『語り』から被災地の現在を考える(談)」(『クレスコ』No.156, 2014年3月), 田中孝彦「東日本大震災と復興の思想―5年間の現地訪問・聴きとり調査から―」(日本臨床教育学会編『臨床教育学研究』(特集 東日本大震災と臨床教育学の課題―当事者の「声」に耳を傾けて―)第4号, 2016年3月), 金森俊朗・辻直人「希望を紡ぐ教育―福島・宮城の教育実践から考える―」(『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第8号, 2016年3月)。

(9) 徳水氏の論稿, 教育実践やその視点, 地域づくり活動や, 実践課題等に言及, 分析・考察している研究論文等には, 例えば次のものがある。船越勝「学力・授業・学校づくりの転換と再定義―3・11が問いかけているもの―」(『生活教育』No.757, 2011年12月), 梅原利夫「人間復興の教育を求めて」(『生活教育』No.761, 2012年4月), 金森俊朗「子どもに重荷を背負わせすぎているか?―地域づくりの当事者を育む学力とは―」(『生活教育』No.765, 2012年8月), 梅原利夫・中村秀夫・小川修一・金馬国晴「座談会 石巻市立雄勝小学校の実践に学ぶ―子どもの姿を中心に, 同僚・住民と協同する―」(『季刊 人間と教育』No.75, 2012年9月), 岡田弘弘「災害と開発から見た東北史」(大門正克ほか編『「生存」の東北史―歴史から問う3・11―』大月書店, 2013年5月, 所収(第1章)), 渡辺恵津子「3・11後をともに生きる―子どもも理解とむすぶ『学び』を考えながら―」(『生活教育』No.775, 2013年6月), 田村真広「地域復興と学校づくり―被災地の内発力に寄り添う―」(『生活教育』No.775, 2013年6月), 朝岡幸彦「(3・11)と向き合う教育実践への模索―教育は東日本大震災から何を学ぶのか―」(『季刊 人間と教育』No.78, 2013年6月), 池田賢市・大森直樹「3・11後の教室の風景―地域・家族・自分を見つめる雄勝小のとりにくみ―」(『世界』No.844, 2013年6月), 梅原利夫「復興過程から希望を見ずえる」(『生活教育』No.777, 2013年8月), 梅原利夫「3.11と教育―教育課程研究委員会の取り組み―」(『民主教育研究所年報2012』第13号, 2013年11月), 梅原利夫「教育課程づくりで地域復興の希望を」(『民主教育研究所年報2013』第14号, 2014年7月), 金馬国晴「子どもの社会参加を考える―雄勝・徳水実践から―」(『民主教育研究所年報2013』第14号, 2014年7月), 桂正孝「(特別寄稿) 子どもたちの人権感覚を育むには―居場所と物語をつくる―」(人権擁護協力会編『人権のひろば』No.98, 2014年7月)。

(10) 白木実践・白木氏の論稿・著書の内容等について直接的に論及し分析・検討しているものに, 例えば以下の論文等がある。村山士郎『解説』にかえて 日本教師たちへのメッセージ―子どもたちの恐怖・悲しみ・苦悩に向きあうということ―(白木次男著『それでも私たちは教師だ―子どもたちと共に希望を紡ぐ―』本の泉社, 2012年7月, 所収), 松下義一「教師の本棚 白木次男著『それでも私たちは教師だ』」(『作文と教育』No.794, 2012年10月), 片岡洋子「被災地と向き合い, 教育を問い直す」(『クレスコ』No.144, 2013年3月), 片岡洋子「3・11後を生きる子どもたち―『あの日から』を誰にどう語るか―」(教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 第1巻 子どもの生活世界と子どもも理解』かもがわ出版, 2013年4月, 所収), 井上大樹「書評『揺れる』心を読みあう―白木次男著『それでも私たちは教師だ』―」(『教育』No.810, 2013年7月), 土屋直人「原発災害のなかの生活綴方実践と『社会科学』―白木次男氏の報告から考えること―」(『教育』No.824, 2014年9月), 伊藤和美「(第2部 戦後教育実践の紹介と批評―実践記録を手がかりに―)『これからも生きていくのだから』 白木次男著『それでも私たちは教師だ』」(教育科学研究会編『講座 教育実践と教育学の再生 別巻 戦後日本の教育と教育学』かもがわ出版, 2014年10月, 所収), 梅原利夫「『無感覚の恐怖』と向き合い, その中で学び生き続ける」(『生活教育』No.794, 2015年1月), 金子真理子「子どもの『意見表明権』の社会的意義―二つの教育実践の分析をもとに―」(『子ども社会研究』第21号, 2015年6月), 金森俊朗・辻直人, 前掲「希望を紡ぐ教育―福島・宮城の教育実践から考える―」。

(11) 加えて, 特に3・11から4年を経た頃以降, 掲載記事数が格段に減っている傾向が見える。これは各雑誌の特集編成方針等への見識・判断の所以のみに由来するものであろうか。

(12) 本稿の文献一覧・目録で取り上げた論稿は, 限られた教育関係雑誌から, 実際には管見の限り目に留め捉え得た範囲のものでしかなく, 確認不足で未だ知り得ず視野に収めていない大切な報告や研究発表など未見の論稿, 見逃し見落としている論稿が数多くあるものと想像される。その意味で本稿の一覧は未完の不完全な未定稿であり, 今後記載を補充・加筆修正の必要がある。

(13) 例えば, 宮城県歴史教育者協議会編『宮城の歴史地理教育』には, 例えば, 一戸富士雄「東日本大震災と過疎地との問題―石巻旧4町, 女川町を例に―」(第21号, 2012年11月)等の, 貴重な論稿が複数掲載されてい

る。

(14) なお、各教育研究集会等の分科会報告での、公開を前提に報告されているものではない教育実践記録群の内実も、大切な内容を持つものであり、これから検討の視野・対象に納めるべきものであるが、その特性上、扱いに一定の困難が伴う。

(15) あるいは、沿岸で当時被災した教師には、喪失や悔悟を抱え、悲嘆、服喪、あるいは沈思のなかにあり、語り得ない状況、語る言葉・書き綴る言葉を持たず（持てず）にいる状況にある方もあると聞く。したがって、上記一覧のみを以て、こういうものと割り切り、分析することで、地域での「教育実践」の展開を把握し得たなどとは言えまい。本稿は、全国雑誌の所論等での表現されたものの、現状の一部を切り取ったのみであって、現実の実像は、地域のなか、その奥深くに（潜んで）あり、その「実践」は（外から容易には）見えない形で、営まれているのかもしれない。それが「地域教育実践」の一つの現実であるとすれば、その存在を確かめ、事実を記し描き、その英知を確かめるために、何をどうすればよいのか、それ自身も重ねて模索していきたい。